

---

# 輪廻は転生しました

叶衣 綾町

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

輪廻は転生しました

### 【NZコード】

N4506V

### 【作者名】

叶衣 綾町

### 【あらすじ】

江戸時代の女剣客、緒神輪廻は光る泉に落ちて、異世界に転生してしまった。しかも転生したのは男の体だった！ 居合の達人が異世界で性転換したり出世したりハーレム作ったり無双する話です。ご都合主義になる予定。不定期更新で申し訳ない。 注：血生臭い表現が出てくる可能性があります。

## 1・生まれ変わりの輪廻

更場武術団さらばむじゅつだんが一つ、緒神輪廻おがみりんね。更場武術団の中でも異彩を放つ女剣士である。江戸時代、いかな輪廻が盜賊とはいえ、女人が刀を持つのは目立つことこの上ない。だから輪廻は、杖に見せた特注の仕込み刀を愛刀として使っていた。

真夜中、輪廻が仲間と共に町の金貸しの屋敷を襲つた帰り、山奥のねぐらへの道中、森の中に光る何かを見た。

「おい、気を付けるよ」

団長の斧原一心が声をかけたが輪廻はそれを無視した。

一人で森の奥に。

そこには光る泉があつた。  
何だこれは、と思ったときには、足を滑らせていた。  
輪廻を飲み込んだ泉はたちまち光を失つてしまつた。

気がついたときには、輪廻は別の世界にいた。しかも、彼女は輪廻ではなくなつていたのだ。

その世界に生まれた輪廻に、両親はラティと名付けた。  
ラティは男だった。

男に生まれ変わった輪廻は、今年で5歳になる少年だった。

(一体これはどうしたことだ…？ そもそもこの世界は一体何だ？)

人々の顔かたちや目の色、服の形、どれもが輪廻の知つているものとは違つていた。

言葉も違つようだが、改めて世界に生まれてきた輪廻は物心つくりにはこの国の言葉をすでにマスターしてしまつていた。

さらに驚いたのは、この世界には魔法と呼ばれる不思議な力がある、ということだつた。

魔法を使えるのは魔女だけで、魔女は輪廻の生まれたサントラン王国には一人しか居なかつた。

（わたしはあのときに死んだのだろうか。そもそも、あの泉は一体何だったのだ？　わたしはもう、江戸には帰れないのか？）

しかし不思議と、輪廻は故郷に帰りたいとはあまり思わなかつた。輪廻の家族はみな死んでいるし、江戸に戻つたところで、また岡つ引きに追われながら強盗を繰り返すだけの生活が待つてゐる。

（しかし…どうせ生まれ変わるなら、せめて女に生まれたかつたな。  
わたしが男とは）

輪廻は無口な子供だつた。他の子供の親からはよく、大人びた子供だと言われた。

輪廻は他の子供たちを遠ざけるようなことはせず、着かず離れずの距離を保つていた。

輪廻が再び剣を取つたのは12歳になつたときだつた。

輪廻を王国軍に入隊させようと考えた父が、輪廻に剣の稽古をしたのだ。

輪廻の両親は平民だった。暮らし向きも、決して楽とは言えない。サントラン王国で平民が豊かな暮らしをするには、商売で稼ぐか、軍に入つて出世するくらいしか、方法がない。

晴れた日に、家の庭で父から剣を手渡された。木で作られた訓練用の剣である。

輪廻は手の中で木剣を馴染ませる。

「ワテイ！ まずは剣に慣れることがだ！ まあ、ビリからでもいいから、お父さんにかかるときなさい！」

「わかりました、お父様」

輪廻は剣を構えた。最後に剣を握ったのは10年以上前だ。しかし、剣の心得は輪廻の魂に刻み込まれていた。

「いいぞ。なかなか様になつているじゃないか」

父が喜ぶ。輪廻はじつと対手を見ている。

ふつ、と一息で踏み込む。

一瞬で距離を詰め、輪廻の剣は父の胸にピタリと当つて停止した。

「え？ あ…」

父が困惑している。輪廻の父は素人だったが、初めて剣を持った子供の一撃を、受けるどころか反応すらできなかつたのだ。

遅い、と輪廻は思つた。少年の体はまだまだ輪廻の意思に追いついていなかつた。

その日、受けの練習だと言つて、父は輪廻に何度も剣を打ち込もうとしたが、とうとう一度も剣を合わせることなく、輪廻は父の剣をすべて避けてしまつた。

夜、父は酒を飲みながら、ラディは剣の天才だと嬉しそうに母に語つた。

その後、輪廻は父の紹介で町の道場へ入れられたが、初日は鍛練で先生を負かしてしまつた輪廻は、一月もしないうちに道場を追い出されてしまつた。

輪廻は14歳の春に、王国陸軍の入団のために王都まで來た。町の賑やかさを見て、輪廻は江戸の風景を思い出した。望郷の気持ちはもう薄れつつある。

「ラディ！ お前なら絶対に騎士になれる！ 自分に自信を持て！」

輪廻を送り出した父は力強く言つた。

輪廻は徒歩で兵舎の前まで向かつた。

係の人間に入団を申し出ると、輪廻が拍子抜けするくらいあっさりと中に入された。

宿舎には木の一戸ベッドが部屋いっぱいに敷き詰められていた。お世辞にも広いとは言えない。

「おーー、ワーディ・ダーレトンと言つたな

輪廻を案内した中年の男が言つた。

「俺はディオル・バルトン。お前たちの訓練教官だ。俺の命令には絶対に従え。でなければここを追い出さ。分かつたら自分のベッドを決めて荷を解け。あと一月もしないうちに募集が締め切られる。そうなれば訓練開始だ。今のうちに自由の空気を味わつておけ」「剣は支給されるのですか?」

「ひよつこが生意気なことを言つたな! お前たちなど木の棒で十分だ!」

耳元で怒鳴られたので、輪廻はおもむろにひそかにうなづく。

訓練教官がいなくなつてから、輪廻は一番清潔そうなベッドの、下の段の中に荷物を入れた。

「よお、お隣さんか

となりのベッドからこもつと手を伸ばした。輪廻はその手を取る。

「ヴィセンテだ。東部出身か?」

「ワーディ。北だよ」

「はつ…同郷のやつがいなくて寂しいぜ」

（それを言つなら、わたしと同郷の人間なんて、この世界にはないのに）

ヴィセンテは日に焼けた肌と筋肉質な腕を惜しげもなく晒している。握手をしただけでヴィセンテの熱量が輪廻にも伝わってくる。背もラディよりずっと高い。

ラディは同世代の青年たちよりも小柄な体格だった。

「お前、貴族か？」

「平民」

「ああそう。俺は貴族だがな。まあ貧乏貴族で、平民と大して変わらない」

「邪魔だ。そこを避け」

横柄な台詞に輪廻が振り向くと、そこには女が立っていた。髪は首の上でバツサリと切られており、意思の強そうな切れ長の目をしている。体は全体的にスリムで、身長はラディよりもありますだ。

輪廻が腕をひつこめると、女はベッドのヘッドに足をかけて上に登つた。どうやら上のベッドの持ち主らしい。

「僕はラディ。よろしく」

女に言つて、ヴィセンテのよつこ手を差し出しだが、そつけなく無視される。

諦めて下段のベッドに戻ると、ヴィセンテが輪廻を見て笑いをかみ殺していた。

「振られたな。お前の勇気は認めよう。でも今のところ俺の方がリードしてるぜ。あんな態度だが名前は聞き出した。ヴァージニア・キャスカート。あのキャスカート家の次女だそうだ」「キャスカート？」

「何だ、知らないのか？ 世間知らずな坊主だな」

輪廻にはなんの関わりもない、異世界の事情に興味を持つては必ずなかつた。

ヴィセンテは声を潜める。

「キャスカート家つてのは超名門だよ。何人も有能な軍人を出してる。最近は景気が悪くて火の車らしいがな。爵位を売ったとかいう噂まで流れてるくらいだぜ」

「爵位があるのか？」

「さて。ヴァージニア本人は持つてないと思うが。にしても、あいつはすげえ美人だ。お前もそう思わないか？」

「まあ、ね」

輪廻は曖昧に頷いた。

心は女で、体は男である。心体の不一致に、輪廻は男と女のどちらも好きになれない性質になつていた。

（このヴィセンテつて男も、まあ悪くない見てくれだけど……さすがに男同士つてのは、わたしの趣味じゃないね）

訓練教官の言つた通り、それから一月後に、輪廻たち新兵の訓練が始まった。



## 1・生まれ変わりの輪廻（後書き）

応援感想叱咤激励要望批評いざれも募集集中です！  
お気軽にどうぞ！

## 2・訓練開始

新兵の訓練は、まずは単純な団体行動の練習から始まり、続いて戦術の基礎部分を模擬戦形式で身につけてゆく。

転生してからそれなりに鍛えてきた輪廻だったが、彼女ですら一日の訓練が終わると疲れ果てて口を利くのも億劫になっていた。

輪廻は団体行動が苦手だった。

江戸にいたころは更場武術団の一人として仲間と共に江戸を血の海にした経験があつたが、それはあくまで背中を任せるに足る仲間がいたからできたことであつて、戦いのことを何も知らない素人のレベルに合わせて行動するのは輪廻にとって非常に苦痛だった。

輪廻は自然と、ヴィセンテと行動を共にすることが多くなってきた。というよりもヴィセンテの方から、孤立しがちな輪廻に声をかけてくるのだが。

珍しい女性の兵士ということで輪廻はヴァージニアのことを気にしていたのだが、彼女は輪廻以上に他人を寄せ付けなかつた。しかし訓練の成績は常に彼女がトップで、その少し下にヴィセンテが位置し、輪廻は羨妬目に見ても中央がいいところだった。

一ヶ月ほど王都の兵舎で訓練を済ませた後、王都の西にある森に野営地を設けてさうに本格的な訓練を始めた。

この日、森の中を半日も走り回られ、輪廻を含めた訓練兵たちは皆顔に汗を浮かべ、荒い呼吸を繰り返している。

野営地の周囲は木ばかりで、最寄りの村からは徒歩で半日は離れている。

訓練生の呼吸に混ざつて、シユクと呼ばれる四足獣の高い鳴き声が時折遠くから聞こえてきた。

「ようしー。今日はこれまで！ 鍛えが足りんぞ！ 明日からは本格的に剣術をやるぞ！ 今夜のつけによく休んでおけ！ 解散！」

訓練教官のティオルが大きな声を飛ばす。

ティオルも輪廻たちと同じだけの距離を走っているはずだが、顔に浮かんでいるのは汗だけで、疲労はまったく感じられなかつた。

（体が重い……。でも、このまま鍛え続ければ、前のわたしよりも体力がつくかも。せつかくの男の体だし、有効活用しなければね）

輪廻がラディの肉体の状態を確認していると、ヴィセンテが話しかけてきた。

「おう。お疲れ。大丈夫か？ 鍛え方が足りんぞ」

「教官と同じ事を言わないでよ……あんたも、よくあんだけ走つて平気だね」

「まあ、体力には自信があるんでね。というかお前、なんか話し方が女っぽいぞ」

「うえ！？ そ、そうかな。疲れてたからかも」

「大体、体力つていうなら、ヴァージニアの方だろう。あいつ、ずっと先頭走つてたぜ」

輪廻はヴァージニアを見た。

さつきまで荒い息を繰り返していたが、すぐに調子を取り戻すと、いつもの凜とした雰囲気をまとつて、タオルで汗を拭き始めた。

「ヴァージニア。お疲れ様。足、早いんだね」

「…………」

ヴァージニアは輪廻にじろりと視線を送ると、田障りだと言わんばかりに背を向けて行ってしまった。

「振られたな

へへへへ、と楽しそうに輪廻の方を、ヴィセンテが叩く。

「何だ何だ？　だらしないのは訓練だけじゃないみたいだな。戦争が終わるのと、ヴァージニアが微笑むのとどちらが早いかな」「その2つだつたら、戦争を終わらせる方が簡単そうだよ……」  
「違いない」

輪廻が嘆息すると、ヴィセンテは豪快な声を上げて笑う。  
輪廻はむくれて、ヴィセンテに言い返した。

「ヴァージニアに無視されてるのは認めるけど、訓練でだらしないつてのは訂正してよ」

「ん？　けど、今日の持久走じゃ思いつきりへばってたじやねえか」「戦うのと走るのとは違うよ」「お前にしちゃ珍しく自信ありげだな」「そんなことはないけど」

（少なくともわたしの刀で殺せなかつた人間は江戸には三人しかいなかつた）

輪廻は自分の剣術には自信があった。だが、その理由を説明したところで正氣を疑われるだけだ。

輪廻は曖昧に濁すしかなかつた。

「あー、もしかして剣術の訓練のことを言つてゐるのか？ やめとけよ。剣術ならゴアーシュが一番だぜ」

「ゴアーシュ？ あいつが？」

「おい！ シュトラウス！」

ヴィセンテが呼びかけると、木の根元で雑談をしていたゴアーシュ・シュトラウスが輪廻たちの方に歩いてきた。

ゴアーシュは目鼻立ちのはっきりとした色男で、金色の長い髪を後ろで縛つているのが特徴だつた。

シュトラウス家は王都の名門貴族なのだが、噂によるとゴアーシュは女遊びが過ぎて父に軍隊に入れられたらしい。

何でもシュトラウス家は国内では五本の指に入るほどの大富豪で、軍に入るまでは働くこともせずに毎日金を湯水のごとく使つては女を囲つていたらしい。

「何だい？ 僕に何か用かい？」

「ゴアーシュは剣術に自信があるの？」

「君、ゴアーシュなどと馴れ馴れしく呼ばないでくれ

「……そうだったね、ミスター・シュトラウス」

そのくせ、ゴアーシュはやたらとプライドが高いのである。ゴアーシュは輪廻に由慢気に言つた。

「僕は5歳のころから剣の英才教育を受けてきたからね。リン・カナベル将軍の教育係をしていた男に剣術を習つたのさ。ついで開いた剣の大会で優勝したこともあるよ」

「ああ、あの、相手の体に当たたらポイントがもらえるっていう

「貴族の嗜みだよ。君のような平民には理解出来ない優雅な武術さ」

「んあ？ 俺も競技剣術クル・ルなんてやつたことねえぞ？」

「それはきみが野蛮だからだよ！」

ゴアーシュが睨みつけても、ヴィセンテは違いないと笑い飛ばした。

「まあ、見物だな。貴族の剣と、平民の剣、どちらが強いか」

ヴィセンテは冗談交じりに漏らした。

「よつしー！ 剣術の基本的な形は、すでに習ってきたと思つ。これからは実践形式で、一対一で打ち合わせてもうつ。順番に前に出ろ！」

教官が訓練生の名前を2つ読み上げると、全員が見守る中央に歩み出て、剣を持って構える。

訓練生に配られているのは木剣ではなく、鋼鉄の剣である。これも訓練用の剣で、刃は潰してある。しかしこの種類の幅の広い剣は打撃力で相手を切る武器なので、切れることがないとはいえ殺傷力は十分に秘めている。

それゆえに、訓練生は全員金属の防具を身につけていた。

輪廻はこの世界に来て初めて触った鉄の剣を何度も振るい、その感触を確かめていた。

(「つやずいぶんとなまくらだね……。愛刀が懐かしい。でも、木剣よりはずいぶんマシか）

久しぶりの柄の感触に、輪廻は震えていた。

中央では訓練生同士が激しく剣を打ち合わせていた。やがて一方が剣を取り落とししてしまい、その時点で勝負は終了。負けた方は出て行き、代わりに別の訓練生が入り、勝った方は一戦目に入る。

訓練生の実力は似たり寄つたりで、勝てる方でも三連勝あたりが限界で、勝利が続くたびに息が上がってどんどん動きが鈍くなるのが普通だった。

「いやあ、まいっただまいっただ。惜しいところまで行つたんだがなあ」  
ヴィセンテは四連勝に手をかけながらぎりぎりのところまで一本を討ち取られていた。

「ヴィセンテ、剣の経験は？」

「剣術つてほど大層なもんは習つてねえが、ガキのときに兄とふざけて打ち合つてたくらいだ。乗馬の方がまだ経験があるぜ」「その割には様になつてたよ」  
「殴り合いなら10人だつてぶつ倒せるんだがな」

ヴィセンテは握りこぶしを作つた。

女子供の首なら一瞬でへし折つてしまえそうな筋肉である。

「次！ ゴアーシュ・シユトラウス！」

呼ばれてゴアーシュが前に出る。不敵な笑みを浮かべていた。

ゴアーシュが一瞬だけ輪廻の方を見た気がしたが、すぐに相手の方

に向き直っていた。

試合が始まると、互いに剣を掲げて一礼。すぐに構えて動き始める。

二度、三度、軽く剣先を合わせる。

互いに様子を見ている状態。

相手がゴアーシュに深く踏み込んだ。右から左から、剣を叩きつける。

ゴアーシュは冷静にそれを捌ききつた。大振りな相手に対し、ゴアーシュは小さく短い動作。

ゴアーシュは相手の剣を払いのけ、流れるように動作で相手の胸先に剣を寸止めした。

相手は剣を落とす。降参の合図である。それを見ていた訓練生たちがざわめいた。

「さすがだ」

「強ええ…」

「シユトラウスか…」

一礼の後、対戦相手が下がり、別の訓練生が呼び出される。

二戦目が始まつたが、ゴアーシュは苦戦することなく再び相手を倒してしまつ。

あつという間に6人まで倒してしまつた。

輪廻の隣でヴィセンテが唸つた。

「さすがだな…。ありやそうとうやつてゐるぜ、剣」

「慣れてるよね」

「ラティはまだ呼ばれてないよな？ あいつに勝てるか？」

「どうだろ？」「

「期待してるぜ。戦友の仇を取ってくれ」

「いやヴィセンテを負かしたやつはもう負けてるし。そもそも、ゴアーシュだって僕らの戦友でしょ」

軽口を返しながら、輪廻はゴアーシュの剣筋を冷静に分析していた。

（足運びが軽い……まるで羽みたいだね。防御も柔軟で、相手をよく見ている。技量はそれなりにあるみたいだ。一対一なら、もう一人前かしらね）

しかし、輪廻が呼ばれる前に、ヴァージニアが呼び出された。

ゆつくりと中央に出てくる。表情はいつもの鉄仮面である。一礼してから一人は構える。ヴァージニアの構えは、両手で正面に剣を構える、とてもオーネックレスなものだった。

「フフ……ヴァージニア・キャスカート。君のことはいつも見ていた

よ」

「…………」

「君に剣の手ほどきをしてあげよう。まあ、いつでもおいで」

ゴアーシュの構えは片手で持った剣を水平に構えたものだ。これは侮っているわけではなく、相手の剣をいなし、その隙を突くための柔軟な防御の体勢なのだ。

（行く！）

輪廻がそう思うのと同時に、ヴァージニアが突進した。  
体重を載せた重い一撃。

ゴアーシュはそれを冷静に対処するが、一の次、三の次と、次々に繰り出される一撃を支えるのに精一杯だ。とても攻撃に転じる隙などない。

ヴァージニアの剣は恐ろしいほどにまっすぐだ。仕掛けもフェイントもない。  
ただ相手を切り伏せるための、どれもが致命傷になりうる正統な剣術。

ゴアーシュは小手先の技術でヴァージニアの剣をぎりぎりのところで処理し続けていたが、とうとう限界が来てしまう。  
ヴァージニアの剣が、ゴアーシュの剣をたたき落とした。

「そこまで…」

訓練教官が一人を止める。

ゴアーシュは呆然とした表情でヴァージニアを見つめていた。

「すげえ……おい、ラディ今見たか！？」  
「…………うん」

輪廻はヴィセンテに頷いた。

憔悴した表情でゴアーシュが戻ってきた。  
ヴィセンテはゴアーシュの肩を叩く。

「おい、そう落ち込むな。相手が悪かったんだよ」

「そんな、あり得ない……僕の剣が……馬鹿な……女なんかに……。  
あんな相手がいるなんて、僕は知らないぞ……」

「はっ。油断したのか？」  
「違うと思うよ」

「ゴアーシュの代わりに輪廻が答える。  
手加減したわけではないだろ？ 単に、相手が規格外だつたという  
だけだ。」

（完成度の高い……隙のない剣術だな。ゴアーシュも上手かつたけ  
ど、しょせんは競技の規則に合わせて組み立てられた剣術……。ヴァ  
ージニアのあれば、戦場で敵と切り結ぶための剣だ）

その後も、ヴァージニアは訓練生相手に連勝を重ねた。  
その連勝数がゴアーシュを超えたあたりで、輪廻の番がやつて来た。

「次！ ラティ・ダールトン」

名前を呼ばれて輪廻はびくりと震えた。  
ヴィセンテが輪廻の肩を強く叩いた。輪廻は視線を送つて返事をす  
る。

ヴァージニアの正面に立つて、その気迫に驚いた。  
鋭敏になりすぎた感覚に、輪廻の全身がギリギリと悲鳴を上げてい  
る。

作法にのつとり一礼をしてから剣を構える。  
輪廻は剣先を地面にだらりと下げる。  
それに構わず、ヴァージニアは勇猛に突貫する。

ヴァージニアの剣が届くよりも先に輪廻の剣が走っていた。訓練生  
のほとんどが目にその剣は鮮明ではない。瞬きの時間が永遠に思え

るせびの高速。

このとき初めて、ヴァージニアが防御に回った。

(よく見えた)

輪廻はヴァージニアの一撃を、わずかに身を低くして回避する。

(ダメ。これは無用心)

ヴァージニアの剣を跳ね上げた。一歩踏み出して切り落とす。が、空振り。すでにヴァージニアは後退していた。

しかし輪廻はヴァージニアの動きを完全に見切っている。

(はい、わたしの勝ち)

さうに前進して、すれ違いにヴァージニアの胴を切った。

綺麗な抜き胴。

剣と鎧のぶつかる耳障りな音すら気にならない。

「そこまでー」

訓練教官の声に、ヴァージニアが呆然と剣を落とした。

その日の最後、残っていたのは輪廻だった。

呼び出されたのが最後の方だったから、ヴァージニアほど勝ち星を重ねることはできなかつたが。

最初に輪廻が呼び出されていても、最後に中央に立つていたのは輪

廻だつただろ!」

「「うテイ！ すげえじやねえか！ お前、剣の腕は抜群だな！」

「「うわっ、ひょっと！」

ヴィイセンテに頭をぐぢやぐしゃと撫でられて輪廻が抗議した。輪廻を苦々しい表情で見ていたゴアーシュが話しかけてきた。

「おい平民、その剣は誰に習つた？」

「ええと」

輪廻の師匠の名前が出かかつたが、この世界の住人に江戸の人間の名前を教えるのはばかられた。表向き、輪廻は平民のダールトン家の長男なのである。

「皿口流」

「嘘をつくな！ あんな剣……平民！」とさが、あんな剣を振るえるはずがない！」

「そんなことを言われても。あー、ヴァージニア！」

ぶつぶつと罵りがかりをつけ続けたゴアーシュはヴィイセンテに任せ、輪廻は宿舎に戻ろうとしているヴァージニアを呼び止めた。

ヴァージニアは立ち止まり、輪廻に振り返る。

輪廻はヴァージニアに駆け寄った。

「ヴァージニア、すげえ強かつたよ。うん、訓練生の中では一番」

「……私に何の用？」

輪廻はヴァージニアの声を初めて聞いた。意外なほど普通の少女の

声。

「ええと、ヴァージニアが強かつたって、言いたくて  
「でも、あなたは私に勝つた」  
「ただついてただけだよ」  
「ふざけないで」

ヴァージニアにピシヤリと言い返された。

輪廻は不用意なことを口走ったと思った。輪廻はたとえどんなに不運だったとしてもヴァージニアを剣で殺せる自信があった。ヴァージニアも、輪廻と自分との実力の差をしつかりと認識している。

「……悪い」

「認めない。絶対に認めない。私は、負けるわけにはいかないの」

ぎろりと輪廻を睨みつけて、ヴァージニアは宿舎に入ってしまった。

## 2・訓練開始（後書き）

ヴァージニア「か、勘違いしないでよね！　本当に強いのはわたしの方なんだからっ！」

### 3・真夜中の決闘

それからもしばらく剣の訓練が続いたが、剣を持った勝負では輪廻は一度も負けなかつた。

剣を持った輪廻は生き生きとしていた。

仲間と共に江戸中を駆けまわつた記憶が蘇る。

面白くないのは他の訓練生である。

特にゴアーシュは、他の訓練生の注目をすべて輪廻がさらうてしまつたため、乱戦形式の訓練などでは執拗に輪廻を狙つていた。しかし、乱戦形式の、言い換えれば何でもありの戦場こそが輪廻がもつとも輝く舞台であつた。

馬鹿正直に真正面から突っかかるゴアーシュを、輪廻はろくに見ることもなく、ことのついでのように切り伏せてしまつ。

ゴアーシュの挑戦は連日続いていたが、輪廻は特に苦戦することもなくそのすべてを退けていた。

「おい」

訓練の終わったある日、ゴアーシュが輪廻を呼び止めた。喧嘩でも始めるのではないかと、ヴィセンテがさりげなく輪廻の横に回る。輪廻は「うそうと曰で山図を送り押しつづめた。

「君、ラティと書つたね」

「ああ」

「姓は何といふんだい？」

「ダーレトン」

「ラティ・ダーレトン……。覚えておひへ、その名前」

「ゴアーシュは爽やかな顔で言つて、輪廻の肩を叩いて去つて行つた。

「何だつたんだろ?」

「ありや、お前の実力を認めるつてことなんぢやないのか?」

「ああ、なるほど」

「あのプライドの高い男が認めたつてことだぜ。こりやす“いことだ。けど、お前を認めてるのはあいつだけぢやないぜ。訓練生はみんなお前に一目おいてる。もちろん俺もな」

「僕だつて、ヴィセンテを尊敬してるよ」

「よせよせ。褒めたつて何も出ないぞ」

口ではやつ言つてこたが、ヴィセンテは照れくしゃみに輪廻から顔を背けた。

しかし、輪廻に対抗心を燃やしていたのはゴアーシュだけではない。最初の敗北以来、ヴァージニアも訓練中は輪廻に対して敵意を剥き出しにして迫つてきた。

一対一で勝ち抜き形式の、剣の訓練である。

輪廻とヴァージニアの、どちらが先に呼び出されたとしても、一人は必ず最後までに立ち会つことになつた。

「フツ セイツ!」

ヴァージニアが斬り込む。

輪廻が見ているのは彼女の足運びだった。移動を読んで、少し上半身を下げれば、ヴァージニアの剣は容易に空ぶる。

ヴァージニアの切り返し。

低い軌道の、胴体を払う攻撃。

輪廻は軸足で体を回転させるように移動し、ヴァージニアの側面で回りこんだ。

「へつー！」

輪廻の攻撃を予見し、ヴァージニアは構えを捨てて飛び退く。しかし輪廻の高速の剣は後ろに下がったヴァージニアを正確に打ち抜いた。

「セーフでー！」

ヴァージニアは悔しそうに唇を噛み締めながら退場した。その日も、輪廻は最後まで勝ち抜き続けた。

訓練生の朝は早い。

夜明け過ぎに当番の者が鐘を鳴らして宿舎の訓練生をたたき起します。食事当番はそれよりも先に起きて朝食の準備をする。屋根だけが張られたテントの下で、40人ほどの訓練生が朝食を食べる。

パンと野菜のスープだけの質素な食事であるが、昼食には肉も出る。

輪廻は朝食をすぐに食べ終わり、水で顔を洗いうがいをしていた。朝の森は騒がしい。虫と鳥の鳴き声がつるさく耳に入る。

宿舎から、ヴァージニアが出てきたのを見て、輪廻は声をかけた。

「おはようー！」

「…………」

「今日は雨が降りそうだね。空模様がすいへ降りこつ

「…………」

「ヴァージニア?」

「わたしに何か用?」

「え? 別に、用があるわけじゃないけど」

輪廻が言葉を詰まらせていく。「アーヴィングは立ち去ってしまった。

その様子を見ていたヴィセンテが、やつてきて輪廻の肩で腕を回した。

「相変わらずだな。ま、女を落とすには根気が一番だ。もつ話しかけないでくれと言われてからが勝負だぜ」

「まさか。別に僕はヴァージニアを落としたいわけじゃない」

「じゃあ何で話しかてるんだ? 好きでもなきやあ、あの態度は我慢できないだろ? 普通」

「でも、仲間だし。ヴァージニアと剣で打ち合ひのは樂しい」

「そりやお前がいつも勝ってるからだろ。……まあ、仲良くなるのも、落とすのと同じくらい難しいだろ? けどな」

「ヴィセンテは詳しいの? その、女の子を落とす方法」

「いや? そういうのはアーチュが専門だろ。血痕じゃないが、俺は女にモテたことがない。いつも振られてばかりだよ」

「そうなの? たぶん、ヴィセンテのまわりの女は見る目がなかつたんだね」

「おひおこ、やめてくれ、氣色悪い言い方は

輪廻は慌てて口を開いた。少し油断すると、すぐこの女の考え方をしてしまう。

しかしヴィセンテは気にした風でもなく話を続けた。

「俺は剣術はできないし、女にもモテないし、頭だって良くない。しかし、世界にはいくらでも剣の上手い奴がいて、上を見上げればきりがない。せめて、戦場で生き残るくらいの剣術と、伴侶を捕まえられるくらいモテればそれで十分だろう」

「頭の良さは？」

「それは次の課題だな。けど今は、とりあえずお前に剣術を教わることにする」

「僕に？ それよりもディオル教官に特訓してもうった方がいいんじゃないかな」

「……お前さ、俺の勘だけ、訓練教官より強いだろう」

輪廻の心臓がドキリと跳ねた。

「そんなことは、ないとと思うけど」

「嘘つけ。お前一度も本気で戦つてないだろ。俺は剣術はできないが喧嘩の経験なら玄人だ。必死になつてるやつと、適当に手を扱てるやつの違いくらい分かる」

「…………」

「おいおい、別に責めてるわけじゃないぜ。お前のは手を抜いてるというよりは、相手に合わせてるって感じだしな。そういうわけで、俺はお前に剣を教わるのが一番だと想つ」

「……教えるのは、苦手なんだけどね」

「別に教える必要はないさ。俺が勝手にお前から学び取る」

「ほんと、ヴィセンテのまわりにいた女は、みんな揃いも揃つて見る田がない」

「よせつて。お前なあ、たまに[冗談じゃなく言つてゐみたいに聞こえてヤバいぜ」

ヴィセンテが半笑いで言った。

二人のそばを通りかかった訓練生たちが挨拶をした。  
ヴィセンテは片手を挙げて大きな声でそれに答える。  
ゴアーシュも通りかかったが、以前とは違い、無愛想ではあるがゴ  
アーシュの方から挨拶をしていた。

「……みんなお前に一目置いてる。お前は間違いなくエースだよ」  
そう言われると、輪廻は戸惑つた。

その日の訓練の終わり。

良い汗をかいて満足している輪廻の横を、ヴァージニアが通りかか  
った。

何か話しかけようと考えていた輪廻だったが、ヴァージニアの方か  
ら話しかけられた。

「……ラティ・ダールトン。お前と決着をつけたい」

「え？」

「深夜、剣を持って、ここに一人で来い」

「承知」

ヴァージニアと、ただの少女ではない。

その声に滲んでいた本気に、輪廻も本気の声で返した。

すれ違いに交わした、ごく短い会話である。

顔を向きあわせることもなく、互いに知らない顔をして別れた。

「……ラディ？ ビうした？」

「大丈夫だ」

輪廻は短く答える。

短く交わしたヴァージニアとの会話が輪廻の頭にこびりついていた。精神の高揚を顔に出さないのは難儀だった。

真夜中、輪廻は教官の田を盗み、一人で宿舎を抜け出す。

倉庫から剣を一本拝借した。鎧は、もともと輪廻の趣味ではないので、身軽なままである。

昼間は大勢の訓練生がいたが、今そこにいたのはヴァージニアだけだった。

彼女も剣を携えている。

祈りを捧げているかのように、ヴァージニアは神聖な雰囲気を纏つていた。

昼間とは違い、真夜中の森は静かである。

輪廻の瞳孔が拡大し、月明かりだけでヴァージニアの姿を細部まで捉えていた。

輪廻が前に立つと、ヴァージニアはまっすぐに見つめ返す。

「ルールは？」

「ない」

輪廻の問い掛けに、ヴァージニアは短く答える。

それで十分であった。

ヴァージニアが動く。

(申し分ない速度だ)

輪廻がこれまで見てきたヴァージニアの中で、今がもつとも尖っていた。

あと半歩で、ヴァージニアの剣の間合い。すでに剣を振るう体勢に入っている。

距離の猶予がゼロになつたと同時に、ヴァージニアの暴力が輪廻を切り捨てるだらう。

そのゼロの隙間に、輪廻は強引に割り込んだ。

「！」

ヴァージニアは驚愕する。

構えてすらしなかつた輪廻の剣が、一瞬の後に、切つ先を、ヴァージニアの喉元に向けていた。

喉元に突き立てる寸前で、止めていた。

ヴァージニアの剣は、空ぶるどころか、切り下ろす、その遙か手前の段階である。

斬り合いにすらなつていない。それ以前の問題だ。ヴァージニアは、ラディにとつて、自分はただの的にしかなつていないと、ということを理解する。

「これが、居合の達人、緒神輪廻の実力であった。

「…………」  
「…………」

暗闇の中で一人はしばらく見つめ合っていた。  
交わす言葉もなく。

しかし、様々なものが交差する。

やがて、ヴァージニアがふと頬を緩める。

「……参りました」

はつきりと、清々しい表情で、ヴァージニアは敗北を認めたのである。

訓練生の朝は早い。

今朝もパンと野菜のスープだけの質素な食事であった。今日も、毎食には肉が出る。

輪廻が宿舎から出てきたのを見て、ヴァージニアは声をかけた。

「おはよう、ラティイ」  
「うん。おはよう」

輪廻は寝ぼけ眼で短く返事をした。ヴァージニアは入れ違いに宿舎に入る。

その様子を見て、ヴィセンテが輪廻に駆け寄った。

「おこ。おこ！ 寝ぼけてる場合か」

「何だよ、朝から騒々しい」

「一体どうこうことだ。何があった。何でそんなに親しくなつてゐんだお前はーー？」

「別に。僕とヴァージニアは互いに実力を認め合つた戦友だからね。朝の挨拶くらいは普通にするよ」

「おこおこ何だその言い回しは。最近のラティはずいぶん口が上手くなつたな」

「口の上手さは、ヴィセントに学んだんだよ」

「いやそんなことはどうでもいい。お前たち、一体どうこう関係なんだ！」

「どうつて、普通の」

ヴァージニアが宿舎から出てきた。

輪廻に近づく。

「ラティ。今日の夜も剣を教えてほしい」

「いいよ。あとで教官に言つて、演習場の使用許可をもらおつ

「それはわたしの方から話しておく」

「うん」

「ありがとう

礼を言つて、ヴァージニアは別れた。

そのやりとりを、ぽかーんと馬鹿みたいに口を開けて見ていたヴィセント。

輪廻は短く答える。

「お、お、お前たち、一体どうこう関係なんだーー？」

「ええと、戦友」



### 3・真夜中の決闘（後書き）

「」の小説を読んだ方は以下のアンケートにご回答ください。

Q1・本作を読み終えてから、「うどんと蕎麦のどちらが好きですか？

Q2・本作の良かつたところ、「うどんもしくは蕎麦の好きなところを挙げてください。

Q3・本作の悪かつたところ、「うどんもしくは蕎麦の嫌いなところを挙げてください。

Q4・本作はプロット（先の展開）を考えずニアドリブで書いた小説です。それはともかく、カレーうどんとカレー蕎麦のどちらが好きですか？

#### 4・前世との遭遇

基本的に王国軍では兵士たちの自主的な訓練は歓迎されている。夕食が終わってから就寝までの僅かな時間が、輪廻たちの「特訓」の時間である。

「はあっ！！」

ヴァージニアの剣を輪廻は片手で捌いている。薄暗い森に剣のぶつかる音がリズムよく響く。

「せこつー。」

輪廻がわざと作った隙に、ヴァージニアは真正直に切り込んだ。輪廻は姿勢を下げて、ヴァージニアの横に切った剣をくぐる。

「はい」

輪廻はヴァージニアの田の前でピタリと止まる。

ヴァージニアは慌てて下がった。これで仕切りなおし。こんな訓練を一人はずつと続けていた。

「おーい。そろそろ代わってくれ

ヴィセンテが不満の声をあげる。

輪廻がヴァージニアに構つている間はやることがないのですと腕立て伏せをしていた。

「ちょっと待って、今終わらせ

」

のんきに、ヴィセンテの方を向いた輪廻だつたが、ヴァージニアはその瞬間に斬り込む。

輪廻はヴァージニアを見もせずに、素早く身をかわすと、ヴァージニアの背後に回つた。

それを追いかけて、すぐにヴァージニアが横に剣を振つた。

それが輪廻に届く前に、ヴァージニアの剣は輪廻に叩き落される。

「…………参つた。どうしてもお前から一本が取れない」

「ヴァージニアはまつすぐすぎるんだよ。ま、それが長所でもあるんだけどね」

「まつすぐ……」

「わたしがわざと隙を作つたとき、正直にそこを突いてきたでしょ？あれ、いつどこの斬り込んでくるかが分かるから、避けるのがすく簡単なの」

「…………わたし？」

「違つた。僕でした。訂正」

「それで、私はどうすればいい？」

「うん。まあ、基本的には今までいいと思つよ。武術は王道が一番強いからね。このまままつすぐに進めば、小細工なんて粉碎できるようになると思う。ただ、王道じやない剣がどういうもののかは知つておいた方がいいかも」

「…………お前の剣は、王道ではないのか？」

「まあ、かなり自分でねじ曲げてゐるところがあるからね。それに

「

事情が事情である。

大勢の人間を相手に立ちまわることが多かつた輪廻には、ヴァージニアのような剣は向いていなかつたのである。

ヴィセンテが歩いてきて、輪廻とヴァージニアの間に立つ。

「ほりほり。こちやつこひないで変われ」

「だ、誰がいちゃつくなど。ば、馬鹿なことを」

「そりだよ。そりこりのを持ち込むのは良くないよ」

「……」

「え、何? どうしたのヴァージニア?」

「いや、別に。気にするな。指導ありがとう」

ヴァージニアは礼を言つて、ヴィセンテと交代する。

そこそん待たされたヴィセンテはやる気満々である。

「オラオラオラ! 行くぜ!」

「ヴィセンテはまず、基本的な足捌きからやった方がいいよ。力任せに振り回すだけの剣は」

「

ブン、と凄まじい風圧をまとった剣が、輪廻の鼻先をかすめた。ヴィセンテが外したのではない。攻撃を見切った輪廻が、半身を少しだけ下げる。ある。

「ほり、避けるのなんて簡単なんだよ。だからヴィセンテは、まず動きの精度を上げるのを」

「セイツ!」

(聞いてない)

輪廻はヴィセンテの剣をかわし続け、ときおりヴィセンテの隙に一撃を差し込んでわざと防御に回らせたりした。

その日の「自主訓練」が終わった後、輪廻は息も上がり、額に汗を浮かべていたが、ヴィセンテはそれ以上に疲労していた。

「使え

ヴァージニアが輪廻とヴィセンテにタオルを手渡す。  
輪廻は礼を言って受け取った。ヴィセンテは礼を言うのもしぶといよしだ。

やがて野営地での訓練が終わり、訓練生たちは王都に戻った。王都に戻つても訓練が終わつたわけではない。

むしろこれからが本番とも言える。

また、これまでひとつつの部屋で寝泊まりをしていた訓練生たちが、ここに至り個室を貰えられた。

王都に戻つてからも、輪廻とヴァージニアの特訓は続いていた。

「はつ！ セーフ！ やつ！」

輪廻とヴァージニアが激しく打ち合つ。

ヴァージニアの上達は早かつた。

以前のように、輪廻に一方的に切り捨てられる「とは少なくなつた。

「うそ。 今日はここまでにしようか」

輪廻は剣を下げる。

ヴァージニアが、呼吸を整えながら頷いた。

「剣筋が前よりも見えにくくなつた。」の調子だと、すぐに抜かれそうだね」

「まさか。私では到底お前に及びそうにはない」

ヴァージニアは首を振る。

輪廻は剣を鞘に納め、防具を外した。

「以前から聞きたかった。お前は、どうしてそんなに強い?」

「…強くなる必要があつたから」

「強くなる必要があつて、強くなれるのは幸運だ」

「そうなのかな」

「ああ。…大抵は、それを乗り越える前に、終わる」

輪廻自身は、自分の剣術を、自慢に思つことも、逆に負い目を感じることもない。

剣術はただの技術だといつのが輪廻の見解である。

ヴァージニアはふつと微笑んだ。

金色の髪を片手でかき上げる。

「お前は自分のことをあまり語りしないな」

「ヴァージニアだつて」

「…そうだな。私には、由々麗で済むような過去がないからだらうな

「僕も同じだよ」

（まあ正確には、まともに信じてもらえない身の上話がないってことなんだけど）

「ところで、明日はどうする？」

「ああ、やついたら」

明日からじめらく休暇である。

訓練生によつては帰郷する人間もいると聞くが、輪廻は王都で過ごすつもりでいる。

ラティ・ダーレトンの両親には未だに愛着を持てずにいたし、休日を楽しく過ごすような趣味も持ち合わせていない。

ヴァージニアはやつかと頷いた。

「お前をやめなければ、明日も剣の指導を、と思つたのだが」「熱心だね。でもせつかくの休暇なんだから、家に帰ればいいのに」

「…そうだな。そうするのが、いいのだうな」

ヴァージニアは含みをもたせた言い方をした。  
しばらく何か考えていたようだが、やがて輪廻に礼を言つてこつものように別れる。

「それじゃあ俺は行くぜ」「行つてらつしゃい」「本当に良いのか？ 姫館はいいぞ？ 金次第でどんな女も抱ける最高にフェアな場所だぞ？」「いいよ、興味ないし」「それもそうだな。姫館には男はないし」「殴るよ？」「殴るよ？」

「冗談。それじゃあ行つてくるぜ。お前も、ずっと引きこもつてちや体に悪いぜ？ 街に出て女の一人や二人引つ掛けてこい」

ヴィセンテは余計な一言を残して輪廻の部屋を出ていった。

今日は休日であるが、輪廻は普段通りの時間に起床していた。部屋で簡単に体を動かしていると、すぐにドアがノックされる。

「……ラディ」

入ってきたのはヴァージニアだった。

訓練の時に見た地味な服ではなく、女性の貴族が着る立派な服である。スカートを履いたヴァージニアは想像以上に様になつていて、美しさにしばらぐ見とれていた。

「……ラディ、そんなに見るな。は、恥ずかしい」

輪廻が黙つていると、ヴァージニアが顔を赤くして抗議する。

（う、美しい……負けた……いやいや、今のわたしは男で、この子と張り合つても仕方ないんだけど、でも、この年で、そ、その色気とか、む、胸とか、う、畜生。畜生！）

「……あの。この格好、何かおかしいか？」  
「いや。服は問題ないよ。綺麗だと思つ」  
「え、綺麗……」

ヴァージニアはまつと顔を背けた。

輪廻は敗北感に打ちひしがれている。

「もとい。それで、ヴァージニア。どうしたの？ まさか、その服を僕に見せに来たとか？」

「うん。あ、いや違う。そうではなくてだな……お前、もしかして、休みの日は行く場所がないのか？」

「今のところ予定はないけど」

「そうか……。もしよかつたら、その、うちに来ないか？」

「うちにて、キャスカートの？」

「ああ。その、屋敷はそんなに遠くないし、お前が来てくれたら、ちゃんとともてなしはする。悪い思いはしないと思つ」

「うーん。悪いけど辞退するよ。僕が行つたら邪魔だうしそれに僕は平民だし」

「いや、私は身分など気にしない」

「でも、いきなり家に行くのは、ちよつと気がひかるよ」

「…………そうか。いや、無理にとは言わん。変なことを言つてすまなかつた」

「今から行くの？」

「迎えの馬車が来る」

「行つてらっしゃい」

ヴァージニアは短く返事をして輪廻の部屋を出た。

昼を過ぎてから輪廻は街に出ることにした。  
ずっと城にこもっているのは気が滅入る。

輪廻が王都をしっかりと観光するのは今日が初めてである。輪廻の故郷である北の街と比べれば、いぶんと賑やかだが、しかし江戸と比べればまだまだ閑散としている印象があった。改めて思い

出すと、江戸のせせこましさが懐かしく感じる輪廻である。

輪廻が王の城を眺めながら歩いていると、前方から走ってきた少女に正面からぶつかった。

「きやつ

一人して悲鳴を上げる。

と、尻餅を付きそうになつた少女の手を輪廻がつかんだ。

一人はじつと見つめ合つ。

桃色の長い髪の少女だつた。緩やかなカーブを描くさらさらの髪が肩に流れている。白い大きな帽子をかぶつていた。

「あの、いつまで握つてるんですか……？」

「ああ、それは悪かつた」

輪廻は手を離す。

少女は少し頬を染めて輪廻をじつと見ている。  
ふつ、と少女は笑みを浮かべた。

「何か可笑しかつた？」

「す、すみません。いえ、今お兄さん、女の子みたいな声を出した  
ものですから、思わず」

「ああ……癖なんだ」

「ぶつかつてすみませんでした。急いでいたもので  
「いらっしゃい、ちゃんと前を見ていなかつたから」

そのとき、人混みの向こうから何人かがばたばたと輪廻たちの方に走つてくるのが見えた。

ひつ、と少女の顔がひきつる。

「あのー、お城へはどうやって行けばいいのでしょうか？」  
「お城って、王城？ ダメだよ、勝手の中には入れない」「わたし、どうしてもお城に行かなきゃいけないんです！」

「待てー！」

二人は一瞬で男たちに囲まれる。輪廻は全員が武器を持つているのを確認した。

輪廻に緊張が走る。

無意識のうちに手が刀を探していく、今が丸腰であることを思い出した。

「探したぜ。さあ、俺たちと来てもらおう」

「嫌ですー！ あ、あなたたち、こんなことをしてただで済むと思つているのーー？」

「さて……どうだろうね」

男の一人がとぼけて言つた。

顔に、波状の赤い刺青を入れた細身の男だ。腰に巻いた帯の左右に三本の刀を差している。さらに背中に交差するように一本。

（あれは……日本刀！？）

輪廻の田は男の武器に釘付けになつた。

男が身につけている武器は、装飾や細部の構造は少し怪しげが、形状は明らかに日本刀を模している。

「おー、そこの男」

赤刺青が輪廻を指さした。

「俺たちは…………まあ、これからこの女を無理やり連れて行く。で、問題はお前だ。俺たちの顔は忘れて、すぐにどこかに行ってしまう。俺たちも面倒は御免だ」

「…………」

輪廻が答えずにはいるが、少女が叫ぶ。

「答えなさい！ あなたたちは何者なのです！？」  
「秘密。言つたら俺たちが殺されちゃう」

ひつひつひ、と男は笑っている。

少女の手が輪廻の服を握つた。震えている。

「…………」

相手は五人。

赤刺青の得体の知れなさが輪廻には不満だった。

「おい、さつきから黙つてるが、お前」

男が言いかけたとき、輪廻は少女の手を握つて、赤刺青とは逆の方に走り出した。

正面にいた男が懐のナイフを取り出す前にその手を蹴り上げる。悶絶した男のそばをすり抜けて、一人は走つた。

「待てやアアアアアアアアアッ！」

赤刺青の怒声。

最も輪廻から離れていた彼が、もつとも先に動き、輪廻たちに肉薄していた。

輪廻は後ろを振り返らずに走る。

人混みの中に入り、裏路地をデタラメに曲がる。

「じつにー」

路地裏から商店の裏口を開け、勝手に中に入つて表に抜けた。大通りでしばらく身を潜めていたが、追手の姿は見えない。

「とりあえず安心ですね」

息の上がつた少女が輪廻に囁つ。かなり際どいといひだつた、と輪廻は思つた。

「ところで、君、名前は？」

「あの、わたしの名前は、シャ シャロと呼んでください。あの、あなたの名前は？」

「緒神輪廻」

つい本当の名前を名乗つた。

「リンネ」と、少女は反芻するようこつづぶやいていた。

「シャロ、あいつらは一体何だ？ あの、剣を五本差していたやつは？」

「わかりません。わたしも、今日初めて襲われたんです」

「君は一体……？」

「すみません。答えられないんです」

シャロはぺこりと頭を下げて誤った。

（日本刀……あの男も、わたしと同じで江戸の人間の生まれ変わり  
なのかな？）

輪廻の手に、存在しない日本刀の感触が蘇った。

#### 4・前世との遭遇（後書き）

シャロ「吸いまじょひー。」

## 5・一日だけの逃避行

輪廻たちはまっすぐに王城へ向かうことができなかつた。一度向かおうとしたところで、通りに赤刺青の姿を見つけ、慌てて引き返してきたのである。

「駄目だ……正面から城に向かうのは危ない。遠回りするしかない。シャロ、街には詳しい？」

「すみません。わたし、街に来たのは初めてなんです」

「僕もだ」

「リンネさんは、何をしている方なんですか？」

「僕は……王国陸軍兵士」

まあ、ヒシャロが目を大きく見開く。

ヒシャロはしづらげじつと輪廻のことを見る。

「まあ、まだ訓練中なんだけど」

「そうでしたか。さぞ名のある家の方なんでしょうね」

「どうしてそう思つのかな？」

「どうしてつて、その……リンネさんはすごく強いですし、それに

親切です」

「僕はただの平民だよ」

(江戸にいたときも、身分はただの町人だった)

「すみません。わたしが間違つていました。強さに平民や貴族も関係ありませんよね」

「…ヒシャロは良い子だね」

「そうですか？ えへへ

シャロは子供っぽく笑う。

輪廻にはシャロのナビもっぽさがとても新鮮に感じられた。

「……リンネさんは、どうして軍人になろうと思つたんですか？」

「僕は平民だからね。偉くなるためには軍に入るのが一番でつとり早いんだ」

「でも軍隊に入つたら、戦つたりしなきやいけないんでしょ？」

「そうだよ。でも僕は、人を殺しても平気だから」

シャロの足が止まる。

輪廻をじっと見ている。

「リンネさんが、人を？」

「うん。まあその、この国に来るずっと前だけど」

「どうして？」

「お金を奪つためだよ」

「そんな……嘘です！　リンネさんがそんなことするはずがないです！」

「本当だよ。僕は　わたしは、お金のために人を殺したことがあります。何人もね。わたしを捕まえようとした岡つ引き　じゃないや、ええと、兵士を殺したときもある」

「どうしてそんなことができるんです？　お金のために、殺すなんて……」

「シャロは、お金で困ったことがあるのかい？」

「……あつません」

「まあ、言い訳はしないよ。わたしの家族には、殺してまで生きるくらいならと潔く首をくくつた奴もいるからね……。殺すくらいなら死ぬのが、本当は正しいのかもしれないよ」

「そんな、ことは……」

シャロが涙声になつていていた。

輪廻は慌てて声を明るべます。

「別にシャロが悪いわけじゃないよ。それに、殺したつていうのもずっと昔の話だし。今は「うしく、ちゃんと眞面目にやつてるんだから」

「そうですか…」

「あー、シャロ、お腹空かない？ 何か買つてきてあげるよ」

輪廻は近くの屋台に走つて行き、一人分の食べ物を買つた。香ばしい肉を香草で包んだものが木の串に刺さつてい。平民の住んでいる地区ではこのよつた食べ物を売る屋台を見かけることが多い。

屋台で買い物をしている間、輪廻は、自分が戻つたとき、シャロはもういないのではないかと思つた。しかし輪廻が元の場所に戻ると、そこにはまつせつめと回じよつて、輪廻の帰りを待つシャロの姿があつた。

シャロに串肉を渡す。

「あの、お金……」

「必要な「よ。シャロに嫌な話を聞かせちやつたお詫び」

「でも聞いたのはわたしですし」

「もう言わないで。給料の使い道が見つからなくて困つてたんだ」

いただきます、と心の中で呟えて輪廻は肉を頬張る。

シャロは輪廻の食べる姿をまじまじと見て、恐る恐る肉に噛み付いた。

「おいしい。すぐおいしいです！」

「シャロは、こういうのを吃るのは初めて？」

「はい。街に来るのが初めてなので」

「ああ、そういえばそうだった……」

「リンネさんは？」

「前に住んでたところで、似たようなのは食べたことがある

はふはふと言いながら、一人はすぐに串肉を食べ終わる。  
食事を終えてから、また歩き始める。

「リンネさん、年はいくつですか？」

「14だけど」

「わたしと同じ年です」

「そうなんだ」

（わたしはてっきり、もつと年下なのかと思った……。ヴァージニアとは、その……えらい違いだね）

主に胸が。あと身長。

とはもちろん言わないが。

「リンネさんです」く大人っぽいです  
「そうかな」

（まあ）つちで生きた時間も合わせれば、あなたの年の軽く一倍以上は生きてるんだけどね）

「わたしまだ子供っぽくて……早く大人になりたいです  
「大人になって何をしたいの？」

「「この国を良くしやー。」

シャロは胸を張つて答えた。

吹き出した輪廻を見て頬をふくらませる。

「……笑うなんてひどいですか？」

「「この国を良くしやー。」」めん。あまりにも突飛なことを言つものだから。……そうだね、シャロがこの国を良くするなら、僕がこの国をやらないとね」

「はーー。約束ですよー。」

シャロは満面の笑みを浮かべる。

「もしかしてシャロって、すごい大貴族の人だつたりする?」

「あ……すみません。わたしのことは秘密なんです」

「いや、無理に聞こうとは思わないよ。それにしても……あの刺青の男は、本当に知らないんだね?」

「はい。わたしは……その、とある事情で街に来ていたのですが、突然の方たちに襲われたのです。でも護衛の方たちが守ってくれて、わたし一人で逃げ出すことができました」

(護衛付きで街に来てる……それでも襲つてくるつてことは、奴らは一筋縄じゃいかないようだね。少なくとも、武器をちらつかせて大人しく帰るような連中じやない)

「襲われる心当たりは?」

「ありません。……あの、リンネさんは刺青の人を知つているんですね?」

「いや、刺青男自体は知らないんだが、あいつの持つてた武器が気になる」

「あの細い剣ですか？」

「あれが、僕の遠い故郷の武器に似ているんで、気になつたんだ。  
もしかしたら同じところから来たやつなのかなって」

「あれは、突くものなのですか？」

「突くこともできるけど、切ることもできる。あれの刀身が僕の知  
つてるものなら、すぐよく切れるはずだよ。でも剣自体はすぐく  
脆いから、使い方が悪いとすぐに折れる」

「リンネさんもその剣を持っているんですか？」

「僕は……武器は全部故郷に置いてきた」

シャロは、輪廻の言葉の端ににじみ出る哀しみに気がついていた。

シャロは大人しく輪廻の後をついて来ているように見えたが、とこ  
ろどいろで街に興味深げな視線を送っている。

輪廻はその度に立ち止まりシャロにさりげなく街を紹介する。  
そのことに気づいたシャロは決まって先を急ぐように言うが、輪廻  
が無理やり寄り道をせると、シャロは目を輝かせて輪廻の説明に聞  
き入つていた。

そうして王都をぐるりと半周回つたとき、

突然輪廻が、歩きながらシャロの手を握つた。

「リ、リンネさん…？」

シャロが上ずつた声を上げる。

輪廻がちらりと横目で見るとシャロの頬が桜色に染まつている。  
輪廻は小声で話しかける。

「まっすぐ前を見て歩いて。後ろに刺青男がいる」

「えー?」

「向こうは、まだこっちが気づいてないと思ってる。だからまだ後をつけているだけだ。僕がカウントするから、ゼロになつたら一気に走るんだ。この道をまっすぐ走れば、多分城につく」「でも。リンネさんは?」

「5、4」

輪廻がカウントを始める。

そのとき、背後の気配が動いたのを感じた。

「シャーッ!」

輪廻はシャロの背中を前に押した。

それと同時に、踵を返して赤刺青の方に突進する。

赤刺青は両手を交差させて一本の刀を腰の鞘から抜き放つた。両側から迫る剣先は輪廻の首を狙っている。

輪廻は刃が首を刎ねる直前に身を低く沈めた。

赤刺青の目には輪廻の体が目の前で突然消えたように写っている。直後、赤刺青は顎に強烈な一撃を受けて後ろにぶつ倒れた。

「ゼロ!」

輪廻が大声で叫んだときには、シャロはすでに走り始めていた。

赤刺青とは別の男が輪廻に迫る。すでに取り囲まれていた。相手はナイフを取り出している。

輪廻は無用心に突き出されたナイフの、その手首をつかんだ。

男の顔に掌をぶつける。

ひるんだ隙にナイフを奪い、反対側の男の腹を横に切った。

男の腹が切り裂かれ、中から血と臓物が飛び出す。

輪廻はその匂いに懐かしさを覚える。

なるほど、世界は違つても、人の中身は同じか。

別の男が長剣で輪廻に斬りかかる。

男が近づく前に、輪廻はナイフを投げて男の胸に刺した。

男はうめき声を漏らして数歩後ろに下がつたが、すぐに力尽きて動かなくなる。

輪廻があつという間に一人の男を殺したのを見て、無事な男たちも怖氣付いて逃げ出した。

「ふつ……際どいところだった」

殴り倒した赤刺青に輪廻が視線を戻す。

それとほぼ同時に、切り上げる刀の切つ先が輪廻を襲つた。

「　　い！」

すんでのところで後ろに下がる。頬がバツクリと切られて血が垂れる。

赤刺青はさらに刀を振つた。

まともに相手はできないと、輪廻はさらに勢い良く後ろに下がる。

一人は距離をあけてにらみ合つ。

突然の刃傷沙汰に、市民たちがざわついていた。

「……手前え、一体誰だ？」

「緒神輪廻」

輪廻が名前を名乗ると、男の表情が固まつた。  
しばらく輪廻を見つめていたが、やがて大声で笑い始める。

「そうか！ お前も落ちてきたクチか！ ハハハハハ！ まさか俺  
以外にもいるとは思わなかつたぜ！」

「ということは、あんたも……」

「ああ。あんたも越後か？」

「わたしは江戸よ」

「ああ？ 手前、女か？」

「女を切れなかつたのが悔しい？」

赤刺青の顔が殺意で歪んだ。

輪廻は、自分が無意識のうちに後ろに下がつているのに気がついた。

（まずい……こいつ、強い！ わたしが最高の状態でも五分つてと  
ころだらうが、素手じやあ天地がひっくり返つたつて勝てっこない）

しかし赤刺青は、やがて殺氣を納めて、とたんに機嫌の良さそうな  
表情に戻つた。

「俺の名前は九条愛型。くじょうあがた 次はあなたの腸はらわたを見せてくれ」

ニヤリと不気味に笑うと、九条は人混みの中に飛び込んで姿を消し  
た。

輪廻はボロボロの状態で宿舎に戻った。

九条と別れてから、憲兵に追われたり人目を忍んだりで、やつと宿舎に戻ったときには真夜中で門が閉じており、見張りの目を盗んで何とか宿舎に戻ることに成功したのだ。

手についた血を洗い、そのままベッドの上に倒れて力尽きる。

シャロとはあそこで別れたきりだつた。

結局彼女が何者だったのか、彼女を追いかけていた九条たちが何者なのかは分からず仕舞いである。

「無事に城まで辿りつけたのかな」

王国軍の兵舎は王城の中にある。  
宿舎に戻るとき、輪廻はそれとなくあたりを調べてみたが、特に変わった様子はなかつた。

「それにしても……九条愛型か」

九条の刀さばきを思い出した。

（しかもあいつ、まだ手の内を全部を見せたわけじゃない）

この世界には自分や九条のような異世界からの転生者がまだいるのだろうかと、輪廻はまだ見ぬ同胞たちのことを思った。



## 5・一日だけの逃避行（後書き）

九条「当カジノは誰でもウェルカム」

## 6・特別な配慮

輪廻にとつては長い休暇が終わり、訓練が再開する。そのころには頬の傷もすっかり塞がっていた。

「なあ教えるよ……その傷一体どうしたんだよ」「だから訓練で怪我をしたって言つてるじゃん」

「馬鹿言え。お前に剣で傷を付けられるやつが訓練生にいるかよ」

ヴィセンテが輪廻に疑いの目を向ける。

輪廻は笑つて「まかす。

ヴィセンテがこれみよがしにため息をついた。

宿舎の前で話している一人の元ゴアーシュが近づいてきた。

「やあ。君たちは休暇を有意義に過ごせたかい?」「まあな」

「人生は無為だよ」

「ふつ……それは結構。僕はこの休みは南の海まで行つてたのさ。軌道車両に乗つてね」

「軌道車両つて……あれか? 鉄道のことか? あんなもん、乗れるのかー?」

ヴィセンテが驚いた声を上げる。

輪廻も少なからず驚いていた。

その反応を楽しんで、ゴアーシュは満足気に頷く。

「そりや、平民はもぢろん、貴族だつて無理だろ? 乗れるのは王女殿下に顔が利く」一部の名門貴族だけだよ。もぢろんシユト

ラウス家は乗ることができる。いやあ快適だねえ、鉄道つてやつは、南の海岸までひとつ走りだからねえ

「ありや軍事機密だろ？んな贅沢に使つていいのか？」

「優雅さを失つた文明に一体何の価値があるというんだい？」  
のヴィセンテ

「はい…そんなことばかりしてつと、いつか帝国に線路」と奪われるぜ

「そりながらにように君たちが戦いたまえ」

と、コアーシュは他人とのように輪廻たちに言った。

それもそのはずで、一般的にこの国ではコアーシュのような名門貴族の人間が前線で剣を持って戦つことはまずない。

軍では建前上、平民も貴族もみな平等であるし、実際訓練期間は平等に扱われる。

しかし訓練期間が終わり実戦に配備されると、力のある貴族、名のある貴族の人事には特別な「配慮」がなされ、司令官待遇、もしくは戦死の危険の少ない内地の警備任務か、悪くとも前線の補給部隊に回されるのが普通である。

後方とはいえ実際に軍で活躍するのはまだ良い方で、貴族の多くは訓練期間を終えた時点で貴族の責務を果たしたとして除隊する者が後を絶たない。

結局のところ、サントラン王国の戦線を支え、命を落としているのはほとんどが平民階級の兵士たちなのである。

「そりいえば俺たち、もうそろそろ正式に着任になるな

クランア  
東部

「ゴアーシュは軍に残るのか？」

「僕としては一刻も早く天使たちの元に帰りたいんだけどね、ほと  
ぼりが冷めるまでもうしばらく軍隊暮らしだ。半年後には君の司令  
官になつていいだろ？ ね。そのときはせいぜい働きたまえ」

「おこづけ、上官侮辱にならない今のうへに思いつきりいじめて  
おひづけ」

「か、階級が違つても僕たちの友情は永遠だよ、君たち…」

くだらないことを話している三人の元にヴァージニアが近づく。  
三人が声をかけるとヴァージニアが返事をした。  
相変わらず彼女の目は輪廻に釘付けになつていた。  
ゴアーシュもそれがわかっているので不愉快を隠そつともせずに顔  
に出している。

「ヴァージニアは？ 実家はどつだつた？」

「特にどつどつことはない。…いつもと同じだ」

「そういえば、ヴァージニアはどつして軍に入ったの？」

「お前こそ、どつして軍に入ったんだ？ お前ほど腕なら道場を開いても食べていけるだろ？」

ヴァージニアは伏し目がちに問いただす。

家や、自分の過去に触れられたくない気持ちは、輪廻にも分かる。

（まあわたしの場合、ボロが出やすいつて理由なんだけどね…）

「あはは。道場からは嫌がられて追い出されちゃつたし、新しく道  
場を開くお金もないしね」

「よしよし。これも運命だと思つことだね。ラディの剣は僕が将軍  
になつたときに存分に使つてあげよつー」

「ゴアーシュは気障っぽく答えた。

それをヴィセンテがからかう。

ヴァージニアは気難しい顔で一人のやり取りを見ている。

輪廻はヴァージニアの横顔を見ながら、果たして彼女は後方で大人しくしているような人間だらうかと、その内にくすぶつている大火の種を見出していたのである。

いずれにせよ、訓練期間の終了はもうすぐである。

それから間もなくして輪廻たちの訓練期間が終了した。正式な軍人になるにあたり、王城で就任式が開かれる。

「おい、知ってるか？」

「知らない」

「まだ何も言ってねえだろ……」

謁見室の前で訓練生たちが並んでいる。

全員が、自分の持っている鎧の中でもつとも上等で上品なものか、そうでなければ軍から配給された鎧を夜中までピカピカに磨いたものを身につけている。

待合室に正方形に並んだ訓練生たちの中には、待たされるのに飽きてヒソヒソ話を始める者もいる。ヴィセンテもその一人だった。

輪廻の後ろから、こそそそと話しかけている。

「今からお見えする女王陛下はものすごい美女らしいぞ。この間

亡くなられた先代のシドニー国王も、若い頃は美男子だつたらしいし

「ヴィセンテは見たことあるの？」

「いや、ない。多分、訓練生は誰もお会いしたことがないんじゃないか？　ああ、ゴアーシュやヴァージニアはあるかもな。女王陛下は最近まで南の保養地にいたんだよ。体が悪いらしくてな。それが国王が亡くなつたもんで、慌てて戴冠式を済ませてこひらに戻つてきたんだんだ」

「じゃあ美女つて噂は誰が流してるんだよ」

「さあ」

「もしそれで実際は微妙だつたらビリするのか。素直に感想を言つたら不敬罪だよ」

訓練生たちの顔には不安以上に、期待と、希望が浮かんでいる。

一方の輪廻は、期待以上に不安と恐怖が上回つていて。

王族の前に出て万が一の無作法があれば首をはねられるかもしれない。他の訓練生たちのように呑気な気持ちではいられなかつた。

「……ラティ。もしかして、怖がつてゐるのか？」

斜め前に立つてゐたヴァージニアが振り向いて輪廻に言つた。ヴィセンテとの会話に聞き耳を立てていたのだ。

「そりや怖いよ。身分と権力を持つ人間はみんな怖い」

輪廻が答えると、ヴァージニアはふと頬を緩ませた。

「お前にも怖いものがあるんだな」

「そりやあるよ。ヴァージニアにはなさそうだけど」

「私を何だと思っているんだ……」「

「そりやおめえ、鉄の女だらう」

「お前後で鍛え直してやる」

ヴィセンテの軽口にヴァージニアが返す。

ヴィセンテは黙った。輪廻から表情は見えないが、きっと顔を青くしたに違いない。

ヴァージニアはもう一度表情をわずかに緩めて前に向き直った。

（あの子も大分…トゲが抜けてきた感じだね。根はいい子なんだけど、どうしてあんなにひねくれちまつたんだろうねえ）

式典が始まる。

謁見室への巨大な扉が開かれた。

訓練生　否、兵士たちは、一糸乱れぬ行進で、女王の前に向かつた。

女王は若い少女だった。

背は謁見室にいる誰よりも小さく、玉座が大きいのでつま先だけが床についていた。

目や唇に化粧が施してあり、肌は陶器のように真っ白にされている。衣装の豪華さと巧みな化粧のせい、輪廻は既視感に襲われたもの、その正体にしばらく気がつかなかつた。

女王のそばに控えた大臣たちが形式的な言葉を述べて、事前に取り決めたとおり、訓練生たちが一斉に膝を折つて女王に頭を垂れた。そのとき、輪廻は女王と目が合つ。

「 あつ！」

輪廻は思わず小さな しかしもしかすると謁見室中に響いたかも  
しない声を上げて、みなが屈む中で一人だけ立つたままであった。

輪廻はいきなり大ポ力をやらかした。

しかし勘違いというわけではなかつた。

輪廻の方だけではなく、女王の方も、輪廻と曰があつてわずかに口  
を開けていた。

（あれはシャロだ！ そつか…あが女王陛下か…けど…女王陛下  
が何であんなとこにいたのかしら）

大臣に睨まれて慌てて輪廻も膝を折つた。

しかし長い式典の最中、女王はまっすぐ前を見ているふりをして、  
ちらちらと何度も輪廻の方に視線を送つてゐる。

結局、式典は滞りなく終わり、輪廻たちは謁見室を後にする。

式典中、女王が何度も何度も輪廻の方を見ていたので、謁見室を出  
た途端に質問攻めに遭つた。

兵舎に戻つてから、上官から輪廻たちにそれぞれ赴任地が言い渡さ  
れる。

輪廻の赴任先はやはり前線だった。

サントラン王国とグリストバル帝国は現在交戦状態にある。

サントラン王国は大陸の中央部と、南方の島国を領土に持つ国家である。

特產品はフェルミナといつ金属で、これを加工するには魔女の持つ雷の魔法が必要になるため、サントラン王国だけがその金属を取り扱うことができた。

大陸で唯一鉄道を持つているのも王国だけである。もとも、鉄道の起動にもやはり魔女の力が必要なので、その効果は極めて限定的であったが。

一方グリストバル帝国は王国の北と東に国境を面した大陸でもっとも大きな国家である。

帝政を布いてはいるが、皇帝は有名無実化して政策などはすべて中央議会が行っている。

サントラン王国とは東部にあるフェルミナの鉱山地帯を巡つて二十年前に開戦した。

当初は王国軍に逆侵攻されていた帝国であつたが、政治の効率化と工業化に成功してからは王国東部の領土を大きく奪うことには成功している。

輪廻の赴任先は東部戦線であつた。

「黒の森」と呼ばれる場所に展開する部隊である。

宿舎の談話室で指令書に目を通している輪廻にラティが声をかけた。

「よつラティ。お前はどうだつた?」

「東部戦線」

「あー。もしかして黒の森か?」

「うん。ヴィセンテは?」

「俺も東部だつた。皆の守備部隊だ。……そつか、黒の森か」

「……言いたことがあるなら、ちやんと言つてよ」

輪廻が強く言つと、ヴィセンテは苦しそうに頷く。

「俺は東部出身だからな、黒の森の話を聞いたことがある。あそこは激戦区だ。あそこに行つた兵士の半分は帰つてこない。補給は悪いし、木が多いから待ち伏せや奇襲がしょひゅつある。それに……」

ヴィセンテは声を潜めた。

「一番悪いのは、指揮官が無能だつてことだ。でも名門の貴族だから政府もクビにできない。だから、死んでもいい平民ばかりが前線に送られる……って噂だ」

「そう……か……」

輪廻は返す言葉を失いかけた。

ヴィセンテは輪廻の目をじっと見つめている。

「……俺が黒の森に行けと言われなかつたのは、俺が貴族だからなのか。くそつ、こんなことつてあるかよ、あいつら」

そう呟いたヴィセンテの目には、輪廻以上の怒りが渦巻いている。しかし輪廻は、ヴィセンテの言葉を、片手を上げてそつと制した。

「でも、大丈夫。わたしはきっと生きて帰るから。生きて帰つて、もう一度あなたに会える」

「……そうか」

「……僕のために怒つてくれて、ありがとう」

「何だ、やめろよ、氣色悪い」

「……」

「ヴィセント、めでたし言つて笑つた。

その後、輪廻は他の仲間たちと指令を教え合つた。ヴィセントの言つたとおり、平民出身の者は前線、それも死亡率の高い場所への赴任が多かつた。

「まいつたなあ。俺、寒いのは苦手なんだけど……」

「クリムは北部？」

「最北端だつてさ。まともに戦闘も起きてない超田舎。なんで俺がこんなところに……」

赤毛でひょいひょい長のクリムがぼやいていた。

他にも、父親がいる部隊に編入になつて顔を青くしていいるリッケスや、南の沿岸部帯に配属になりこれで毎日魚釣りができると喜んでいるジユリアンなど、悲喜こじらもであつた。

そして意外なことに、ゴアーシュの表情は険しかつた。

「そういえば、ゴアーシュは？ 王都に残るの？」

「僕は……前線送りだつた」

「え」

「そんな……まさか……僕が……お父様は……」

ゴアーシュの人事に「特別な配慮」は働かなかつた。

シユトラウス家はよほどきつい炎をゴアーシュに据えたいらしい。

（まあ、もつとも、この世界にお炎なんてないんだけれども）

「ちなみに、ゴアーシュはどこに配属になつたの？」

「……黒の森」

「僕と同じだ」

「戦友よー」

ガシッ、と抱きついてきたゴアーシュを、輪廻は少しじきだきしながらひつぺがした。

（にしても、ここつも黒の森とは…。炎を掘えるつていうより、このまま前線に送つて殺してしまおうつて考えてるんじゃないかな、ゴアーシュの家人達は）

「おい、ヴァージニアはどうだつたんだ？」

ヴィセンテが、部屋の隅にいたヴァージニアに声をかける。ヴァージニアはゆつくりと顔を上げた。

「私は……王城勤務だつた」

「ああ、やつぱりそつか」

「…………」

「ヴァージニア？ どうしたの？」

「私は いや、いい」

ヴァージニアは憂鬱な顔で首を振ると、輪廻たちに背を向けて立ち去つた。

## 6・特別な配慮（後書き）

ファンタジーはアメリカで生まれました。日本の発明品じゃありません。我が国のオリジナルです。しばし遅れを取りましたが、今や巻き返しの時です。異世界召喚がお好き？ 結構。ではますます気になりますよ。まあどうぞ。異世界チートリップのニュー・モデルです。無双でしょう？ んああ仰らないで。文章が台本形式、でも地の文なんて見かけだけで読むと疲れるし、よく目が滑るわすぐ文体が変わるわ、ろくな事はない。空行もたっぷりありますよ、どんな斜め読みの方でも大丈夫。どうぞ一読してみて下さい、いいハーレムでしょう。余裕のカップリングだ、ヒロインの数が違いますよ。

## 7・意地と偏見

式典の日の夜、兵士たちは宿舎でわざやかなパーティを開いていた。酒を飲んで羽目を外している者もいる。

一番人気だったのは訓練教官のディオル・バーレトンである。兵士たちは口々にディオルに感謝を述べていた。

輪廻も食事をしながらしばらく談笑に加わっていたが、外の空気を吸いたくなつて、こつそりと宿舎を抜けて外に出た。

輪廻は少しの間、ぼんやりと夜空を見上げ、故郷の村に思いを馳せていた。

なぜか輪廻は、前世の故郷である日本のことではなくて、ラディ・ダールトンの故郷である北部の村が懐かしかった。

（もう14年…そろそろ15年。それだけいれば、愛着だつてわくだらうぞ）

ガサリ 。

近くの茂みから物音が聞こえた。輪廻は身構えた。

じつと息を殺してそちらを伺う。

誰かが隠れているのは明白だった。

「そこにいるのは誰？」

声をかけると、相手の動きがピタリと止まった。侵入者だと確信する。

輪廻はそろりと足音を忍ばせて近づいた。武器は持たなかつたが、相手の気配はただの素人である。

輪廻が飛びかかる機会を伺つていたところで、侵入者の方から姿を現した。

「リンネさん！」

暗闇の中でも輪廻の目は相手の顔を鮮明に捉えていた。

輪廻の「」とをそう呼ぶのはこの世界でたつた一人だけである。

「王女様……どうしてこんなところに」

「はい。リンネさんに会いたくて、こいつそりと抜け出してきました」

「僕に会うために？」

「……リンネさんの名前、本当はラディさんっていうんですね。わたし、あなたにお礼が言いたくて、ずっと探してたんですよ？ どうして嘘の名前を教えたんですか？」

「嘘ではありません。ラディ・ダールトンの方が嘘なんです。僕のわたしの本当の名前は緒神輪廻といいます。ここではない、遠い世界から来ました」

「リンネさん。あのときは助けてくれてありがとうございました」

「いえ。女王陛下の下僕として当然のこととしたままでです」

「あの……その言い方、やめてくださいませんか？ わたしはいつもの……一緒に街を歩いたときのリンネさんがいいです」

「でも……王女様は」

「いいんです。あなたの前では、ただのシャロでいたいのです」

「そう わかつたよ、シャロ」

輪廻が親しみを込めてそう呼ぶと、シャロは嬉しそうに微笑んだ。

「にしても女王がこんなところにいていいの?」

「本当は駄目ですね。見つかったら怒られてしまします」

「女王様でも怒られるんだ」

「はい。大臣たちや教育係にいつも小言を言われています」

輪廻が笑うと、シャロもつられて笑つた。

「そういえば、リンネさんって」

「ああ、シャロ。輪廻つてのは本当の名前なんだけど、リリではリティつてことになってるんだ。だから、僕を呼ぶときは」

「わかりました。リティさんですね」

輪廻は頷いた。

しかし、シャロはつづむこと、恥ずかしがり言ひ。

「……ですが、ふたりきつのときは、リンネさんと呼ばせてください。駄目ですか?」

「いいよ

「はい! ありがとうございます、リンネさん!」

シャロは表情を輝かせた。

輪廻とシャロは宿舎の裏で、ベンチに腰掛け星を見ながら話していた。

不思議とシャロには、転生のことを話してみたくなった。最初に本名をぼろりとこぼしてしまったからだろう。

輪廻が生まれ変わった話を聞いて、シャロは口を開けて驚いていた。

「輪廻さん…故郷が恋しくありませんか？」

「今はもう、こつちが第一の故郷みたいなものだけね」

そして話題は、輪廻のこれからのことへ移つた。

「もつこえは、リンネさんはずっと王都にいるんですか？」

「いや、正式な配属先が決まつたんだ。黒の森の部隊」

「黒の、森」

シャロは顔をこねねりせりゆつと繰り返す。

即位したての王女とはいへ、その悪名高き戦場の女は耳に覚えがあつた。

長い沈黙の後、シャロが口を開いた。

「……リンネさん。わたしが軍務省相に言つて、あなたの人事を

」

「ワガトイ！」

シャロの面撫を遮つて誰かが輪廻のことを呼んだ。

そちらを見ると、ヴァージニアが走つてやつてくるといつだつた。

「ワガトイ、じんなどひで何をしてこる」

「ちよつと風に当たりたくてね」

「……シャロ？」

ヴァージニアがシャロを見て眉をひそめる。

シャロの方も、ヴァージニアを見て立ち上がつた。

ジ二！」

「シャロがどうしてこんなところにいた……ラティ？」

「あ、うん、えーと、一人は知り合いなの?」

卷之三

ヴァージニアとシャロは互いに顔を見合わせる。

「幼なじみだ。昔、よく王城に遊びに来た

「ええ。わたしが病氣がちになつて、南の方で暮らすようになつてから、しばらく会つていなかつたのですが……」

（そういえば、ヴァージニアの家は名門貴族だったね。 その繋がりかな。昔から優秀な軍人を輩出してるって聞くし）

「や、きの音典、私はす、とシヤロのレと見て、いたんだぞ。なの」

「おんなじ、いい抱きせんでした。」

「アリーナトドキリ第一回、アーネスト、郡長から返答が

てきなんですか」

「ラディに、会いに？」

シャロは無邪気に言つたが、ヴァージニアはじりつと、睨みつける  
ようにシャロと輪廻を見る。

彼女の視線の鋭さに輪廻はたじろいたが、シャロは『氣に』もとめず、輪廻に言つ。

「あら、アーティさん。わつおのお話ですか？」

一  
ああ、黒の森の

「ちよつと待て。私の話はまだ終わっていないぞ。二人の関係は一体

何だ？ どこで知り合った？」「

「ジニー、なんでそんなに怖い顔を？」

「いや… それは… ゴ、ゴホン。ラディと私はともに剣を習つた仲だ。その、女王陛下と深夜に密会していたとあつては、事情を知りたくなるのが人情だらう」

「なるほど。ジニーはわたしじゃなくて、ラディさんがことが気になるわけですね」

「そうじゃない。もちろん、シャロのことが一番気になる」

「あのー。別にそんな事情があるわけじゃなくて、たまたま、この間の休暇の時に、街で会つたつてだけの仲だから。… そういえば、シャロは何で街にいたんだ？」

何気なく質問した輪廻だが、それを持ちだした途端、シャロがしまつたという顔をした。恐る恐るヴァージニアの方を見る。

ヴァージニアが低い声でシャロを呼んだ。

「シャロ。またあなたは

「じ、ごめんなさい！」

「また抜けだしたのか！」

「ひいっ！ そんなに怒らないで！」

「みんなに迷惑がかかるからと、あれほど言つていたのに！ シャロはもうただの姫じゃなくて、女王陛下なんだぞ！ もし何かあつたらどうするんだ！」

「で、でもちゃんと護衛も何人か連れて行つたし」

「そうやつてお忍びで外に出ること事態が軽はずみだと言つているんだ！ 女王の権力をそいやつて濫用して

「

以降数十分の説教について、輪廻は完全に蚊帳の外であつた。言いたいことを言い終えたヴァージニアが満足気に頷いた。シャロはげつそりしている。

ちなみに街で謎の剣士に襲われた」とはヴァージニアには黙つていた。

言えば街で人を切り捨てたことまで言わなければいけなくなるし、それにこれ以上シャロの説教を長引かせるのもかわいそうだと思った。

「ぐすり……もうしない」

「当たり前だ。……おいらティ、このことは秘密にしてくれ。女王陛下が、幼なじみとはいえ、一介の新兵に説教されることが知られたら、その、士氣にかかる」

「分かってる。好き好んで言いふらしたりはしないよ」

「うむ。よろしい。……で。話を戻すが、シャロはラティに一体何の用だ?」

「はい。式典でラティさんの姿を見かけて、単にもう一度お会いしたいと思いまして」

「私のことは目に入らなかつたのに、ラティのことはすぐにつけたわけだ」

「……ジー?」

「別に? わあ、要件は済んだだろ? 早く城に戻れ」

「あ、まだ終わっていないです」

「何?」

ヴァージニアの声があつという間に不機嫌になる。

普段から不機嫌そうな声なので他人ならあまり変わらないように感じるだろうが、輪廻は最近になつてヴァージニアの機嫌不機嫌がなんとなく読めるよつになつていた。

が、輪廻よりもずっと付き合つが長いはずのシャロはヴァージニアに背を向けて輪廻に向き直る。

この少女も大概マイペースである。

「わたしが軍務省相に言つて、あなたが黒の森に送られないようになります」

「ちょっと待て。それはどういうことだ」

「だつて……黒の森のことは、ジニーだつて知つてますよね？」 だからわたしは

「それはもちろん知つているが……しかし……」

ヴァージニアは慎重に言葉を選んでいた。

「それでラディを前線に送らなかつたとしても、ラディの代わりに誰か別の人間が送られるだけだ。王たる者がそれでは」

「わたしにとつてラディさんやジニーは大切な人です。それを守るのが悪いことなのですか？」

「しかしシャロは王女なんだぞ。シャロの権力は個人的な希望を叶えるために『えられたわけじゃないんだ』

「ジニーはラディさんが死んでもいいの？」

ヴァージニアが言葉を詰まらせた。

言い返そうとしたが、結局、何も言えなかつた。

輪廻はヴァージニアを手で制した。

「シャロ。僕一人だけが逃げることはできないよ

「どうして！？」

「僕が行かなければ、仲間の誰かが戦争に送られる……。一応、一緒に訓練した仲間だしね。愛着も、わいてるし。弟子に先に死なれたらたまらない」

輪廻はちらりとヴァージニアを見た。

彼女の表情の意味を輪廻は考へる。それは憐憫か、歯痒さか。

「それに他の奴ならござりはず、僕なら戦場でも生き残れる。僕は剣の達人だよ」「ラティ……」

シャロが輪廻の手をじっと見つめていた。

本当の心を見透かされそうで、輪廻は手を逸らしたくなる。まるで尋問されているかのような時間が過ぎた。

やがてシャロはため息をついた。表情を和らげる。ほつとしたのは、むしろ輪廻の方だった。

「わかりました。変なことを言つてすみませんでした。わたし……女王失格ですね」

「大丈夫……シャロなら良い王様になれる」

輪廻はシャロの頭を撫でた。

撫でてしまつてからほつと我に帰つた。女王陛下の頭を撫でるなど不敬にも程がある。

シャロの頭が丁度いい位置にあつたのと、女同士の気安さでついつてしまつたのである。

「はっ」

しかしシャロは輪廻になされるがままで、手が撫でる度に可愛い妙なうめき声を上げて顔を真赤にしていた。

しかしごく、ヴァージニアの機嫌がさうに悪化したのを感じて慌てて手を引つめる。

シャロは自分の頭に触れて、少し不満そうに歯を尖らせながら、上

目遣いに輪廻を見た。

出発の日になつた。

輪廻は家族への手紙を投函してから、荷物をまとめて宿舎を出た。転生してから輪廻は、物を所有することへの欲求が甚だしく低下していた。荷物は着替えが2、3着ある程度だ。

輪廻が一緒に訓練を受けた仲間たち大切に思つてているのは事実だ。輪廻が自分なら戦場でも生き残れると思つていてもまた事実である。

しかしながら、輪廻の根底にあるのは、異世界から来たことに対する引け目である。  
もし生き残るのなら、異世界から来た自分ではなく、この世界の人間でありべきだと輪廻は考えていた。

（まあ：死にたいてわけじやないんだけどさ）

自分に言い聞かせるように輪廻は思つた。

東部戦線までは馬車で向かう。

輪廻と同じ境遇の新兵たちが、輸送用の巨大な馬車に乗つて移動するのである。

馬車の発着所に兵士たちが集まつてゐる。

出発の時刻までゴアーシュと一人でぼんやり待つてゐると、輪廻は突然、誰かに後ろから肩を叩かれた。

「ラティ、早いな」

「つてヴァージニア！？ どうしてここに！？」

「どうしても何も、私も黒の森の部隊に配属になった」

「ええ？ だつてヴァージニア、王城勤務だつて……」

「うむ。きっと何かの間違いだつたのだろう。人事に間違いはつきものだからな」

「嘘つけ、キャスカート家の名前を使って圧力をかけたんだらうが」

「ヴィセンテも！？ なんで！？」

当たり前のように、ヴィセンテが輪廻のそばに立っていた。  
さつきまで落ち込んでいたゴアーシュが、予期せぬ二人の登場に言葉を失っている。

「まあ多分、そこのお嬢ちゃんと同じ理由だらうな」

ヴィセンテが笑いながら言つと、ヴァージニアはそっぽを向いた。

「ちなみに俺は家の権力なんかないんで、素直に上官に直談判に言った」

「よく許してもらえたね」

「なあに、上官の奥さんの悪口を大声で言つてやつたら、喜んでこつちの部隊に移してもらえたよ」

「無茶するなあ、もつ……」

輪廻は呆れて言つた。

「しかし君たち、本当にいいのかい？ こんなのが聞いたことがないよ。特にヴァージニア、君が死んだら、キャスカートの方々が

「少しでも早く戦争を終わらせ、国に勝利を与えることが貴族たる私の責務だ」

「まあ、どうせ人間はいつか死ぬからな、いつ死ぬかとどこで死ぬかと誰と死ぬかくらいは自分で選んでみたくなったのぞ」

ゴアーシュに対して、ヴァージニアとヴィセンテがそれぞれの哲学で答えた。

ゴアーシュはなおも不満そうだったが、一人の意志が固いことを確認して、それ以上は何も聞かなかつた。

仲間たちを載せて、馬車はゆっくりと走りだした。

王都から黒の森まで半月はかかる。

移動の最中、輪廻は15歳の誕生日を迎えた。

## 7・意地と偏見（後書き）

シャロ「リンネさん、出発の準備はいいですか」

輪廻「うん。荷物はこれだけだし」

シャロ「リンネさん、剣はお餅でしょうか」

輪廻「えつ」

シャロ「王国軍の剣はお餅ですか」

輪廻「いや知らない」

シャロ「えつ」

輪廻「えつ」

シャロ「まだお餅になつてないところですとか」

輪廻「えつ」

シャロ「えつ」

輪廻「変化するつじ」と?

シャロ「なにがですか」

輪廻「剣が」

シャロ「ああ戦い続ければ階級が上がつて剣が変わりますよ

輪廻「そなんだすごい」

シャロ「ではお作りいたしましょうか無料ですよ

輪廻「腐つたりしない?」

シャロ「えつ」

輪廻「えつ」

帝国軍カリナ・エーデル中将は、軍務省長官との会議を、帝都にある帝国軍参謀本部の自分のオフィスに設けた。

ジョン・グレイス長官は、歳60の老人だったが、眼光のねちっこさと人の弱点を即座に見抜く才能は噂に違わず健在であった。

カリナは軍務省長官を油断ならない人物だと考え、オフィスに入れてからも自分の一拳一動に細心の注意を払わなければならなかつた。

「それで、私は東部方面の担当になるのですか？」

無駄な会話をしたくない一心で、カリナはすぐに本題を切り出す。王国の側から言う場合の「東部戦線」と帝国の側から言う「東部戦線」は同じものである。

王国にとってその場所は国境の東側であり、帝国にとっては領土の東側なのである。

カリナ・エーデルは帝国軍参謀本部では珍しい、女性の士官である。さらに珍しいことに、彼女は帝国軍最年少の中将であつた。

彼女の生まれは一般の商人の家である。

父の死後、野心を胸に秘め士官学校に入學し、その後は実力のみで現在の地位に上り詰めた。

人は彼女を天才傭兵家と呼ぶ。

肩まで届く銀色の髪と鋭い眼光、それに真っ白な肌は、厳しいながらも気高く生きる美しさを秘めている。

…と、帝国のゴシップ紙は彼女のこと表現した。

しかし実際は肌の手入れをサボるあまり最近はガサガサだし、髪は

内地にいるときも3日も4日も平氣で洗わないときがある。

何より致命的なのは、カリナは部屋を片付けるのが苦手だった。さきほどから長官がカリナの話には上の空で、しきりに部屋の中を眺めては嫌そうな顔をしているのもまたにそれが理由だらつ。

長官は、ソファの上に散らばっていた、本と下着と書き損じの書類を丸めたものと、鼻をかんだちり紙とこぼした紅茶を慌てて拭いたまま忘れていた雑巾を手でさりげなくどかした。

ちなみにカリナの同僚たちは、一度彼女のオフィスを訪れると大抵は一度と来ることがなかつた。

「…とにかく、冬に向けて我が国は北部に物資を集中せざるをえない。首腦部はそういう結論に達している」

「でしたら、私も北部戦線に行くべきでは？」

「いや、最近は東部戦線への圧力が高まつてきている。それに南方の部族の反乱もある。あそこは反乱政府と王国が結びつくのは厄介だ。ここはどいつもつても、王国のこれ以上の浸透を防がなければならぬ」

「なるほど……。それで、私の地位はどうなるのですか？」

「君には第3師団を任せる」

カリナの眉がひくりと動いた。

北部戦線では一個連隊の指揮を任せられ、奇策を用いて王国軍に対して大きな戦果を上げた経歴があつた。

それがいきなり師団相当の軍隊を任せられるのは、奇抜な人事だと言えた。

「……期間は？」

「冬が明ければ、再び軍の再編成が行われる。そのとき、我が軍は

東部戦線に戦力を集中し、一気に方をつける

（なるほど。つまり、試用期間というわけね…。その間に成果を挙げなければ切られる、というわけか）

カリナは頷いた。

もとより正式な任務である。承諾する他はない。

「補給も制限されるし、増援もそudsは送れん。だが切り札を一枚与えよう」

「切り札？」

「入ってきたまえ！」

長官が大声で呼ぶと、オフィスに一人の男が入ってきた。  
一目見て、手と足のバランスがおかしいと思った。  
どちらも長い。

そして髪は錆色の赤である。筋肉質で、無精髭に、長い髪を後ろで縛っていた。

「この方は？」

「よう。俺の名前はイールズだ。あんたが俺の主人か？」

不遜な態度でイールズは名乗る。

名前を聞いた途端にカリナに衝撃が走った。

「蛇槍イールズ…」

その名前には心当たりがあつた。

南方の反乱軍に対する軍事作戦での活躍は耳にしていた。

民兵上がりのこの男は、たった一人で、中隊規模の敵を壊滅させた  
という英雄だ。

否、この男が英雄などであるものか。

この男は 毒蛇にたとえられる忌み者。

「切り札といつこは切れすぎですよ、長官」

カリナは思わず笑いがこみ上げていた。

イルズは主の様子を見て満足そうに頷く。

オフィスを出る際、長官が言った。

「それから君、出発前に部屋を片付けておきなさい」

「…はあ。あの、今日は長官がいらっしゃるので、一応片付けてお  
いたのですが」

「…………」

長官はなんとも名状しがたい表情を浮かべて、それ以上は何も言わ  
ずに帰つた。

輪廻たち新兵が黒の森に到着したとき、季節はすでに秋だった。  
湿つた真っ黒の地面。背の高い木が空を覆い隠しているかのようだ。  
基本的に舗装された道などなく、柔らかな土と、落ち葉に、張り巡  
らされた木の根が大部隊の進行を困難にしていた。

馬車から降りて、輪廻たち新兵は部隊のテントに挨拶に行く。

黒の森の戦線にはたくさんの兵士が参加しており、訓練所の仲間で輪廻と同じ隊に配属されたのはヴィセンテ、ヴァージニア、ゴアーシュの三人だけである。

白い円筒形のテントの中が隊長のための部屋になっていた。  
部下の一人がテントの中に新兵の到着を告げると中から「入れ！」  
といふ威勢の良い声が聞こえる。

中に、猿のような顔をしたいかつい男が仁王立ちしていた。銀色の胸当てのこぶしが鋲び、切り傷がついている。

ヴィセンテが、度胸試しどばかりに一番最初に口を開く。

「隊長！　俺たちは本日からこの隊の」

「私は隊長ではない」

とこう短い答えが返ってきた。

「あのう……それでは隊長はどういらっしゃるのですか？」

ゴアーシュが恐る恐る尋ねた。

男が視線を向けると怯えたゴアーシュが体をこわばらせる。

「……隊の中で、一番威張っている女が隊長だ」

ぶつきりぼうにそれだけを答えた。

隊長はすぐに見つかった。

テントを出て外を歩いていると、屈強な男たち数名に罵声を浴びせ

腕立て伏せをさせていた。

「た、隊長！ もう限界っス！ 腕がふるふるしてます！」

「馬鹿野郎！ 切り込み役がそんなんでじりする！ そんなひ弱じやスプーン一本持てねえぞ！」

「ひいっ」

弱音を吐いた兵士の背中を踵で何度も踏みつけていた。

「もしかして、あなたが隊長殿ですか？」

ゴアーシュが真っ先に声をかけたのは、ひとえに隊長が美女だったからに他ならない。

黒い短髪のスラリとした体型の女だった。

一見してか弱いほどの瘦躯だったが、よく観察すれば全身を無駄のない筋肉が覆っているのが分かった。

重い剣を振り回すためではなく、長い時間動き続けるための最適化された体だ。

その隊長が、ゴアーシュを見て、加虐的な表情でニヤリと笑う。しまった、声をかける相手を間違えた と、ゴアーシュが後悔したのが輪廻には手に取るように分かった。

「そりかそりか、お前たちが雛鳥か！ 待ちかねたぞ。ふふふ、安心しろ、このオレが精一杯鍛えてやるからな。立派な雄鶏に育ててやるぞ喜べ」

「アブリル・ヒルマン王国軍東部方面軍一一番隊隊長殿。女王陛下の命を受けてただいまより我々四人が貴官の指揮下に入ります」

「あーあー、よしなに。オレのことは隊長か神様と呼べ」

眞面目に形式ばったことを伝えたヴァージニアに対して、ヒルマン隊長は型破りである。

「うちの隊のルールは簡単だ。第一に仲間を見捨てないこと。第二に国を見捨てないこと。第三に自分を見捨てないこと。お前たち雛鳥は何かあればすぐにくたばる出来損ないの鳥だ。だから雄鶏になるまでは絶対に生き残れよ。オレの命令に従つていれば生きて故郷に帰らせてやるぜ。そういうば、補佐官のリングには会つたか？　あいつ顔は怖いが腕はそれほどでもない。まあ隊の中じや一一番田だ。一番は間違いなくこのオレだぜ」

「ここにいるのが王國軍の全軍ですか？　記憶では、黒の森には五個隊が展開しているはずですが」

「一番隊と三番隊は森の北部で作戦行動中。総司令部と、それから四番隊と五番隊の一部は偵察行動中。ここにいるのはオレたち一一番隊と、五番隊の後詰めだけだ」

ヴァージニアの質問に隊長が答える。

ヴァージニアの言つ通り、大部隊が展開できることを差し引いても森にはずいぶんと人気がない。

（なるほどね、わたしたちの部隊は留守番か…）

「それで、僕たちはこれからどうのこうにすればいいのですか？」

「今は待機中だから何もないが、普段から鍛錬だけはしておけ。毎日のたゆまぬ努力こそが生存率を上げるのだ。隊の細かいルールは補佐官から聞け。以上、解散！」

輪廻たちは寝床の確保と細かい事務手続きを済ませる。

最前線であるので、すぐに防具と剣が支給された。

動きを制限される鎧は輪廻の望むところではなかつたが、新兵が部隊の決めた方針に逆らえるはずもなかつた。

それにしても初日はやることがない。

輪廻たち四人は外で待機している先輩たちに挨拶をして回つていた。

「それにしても、ヴァーボニア、君も来るなんて珍しい」「そうか？」

ゴアーシュの疑問に気のない返事を返した。

それにヴィセンテも同意する。

「だつて最初に会つたときなんか、まともに口も利かなかつたんだぜ」

「うへ、つむせこぞー！」

「別にいいじゃねえか。今の方がいいと思つぜー。まだ取つ付きにくいけどな

「…勘違つするな。単に、仲間に對しては、もう少し交流を持つた方がいいと思つただけだ。その方が戦場で生き残れるしな」

ヴァーボニアはそう言つてからちらりと輪廻の方を見る。

輪廻は意味が分からなかつたが、とりあえず無難に微笑み返しておいた。

ヴァーボニアは機嫌を損ねて輪廻に背を向けて離れて行つた。

そのとき、見回りに行つていたはずの兵士が走つて戻つてきた。木々の間を走つて、輪廻たちの目の前に飛び込んでくる。

「て、敵襲！」

そう叫んだが最後、その男はばつたりと前から倒れて動かなくなつた。

背中には矢が刺さつている。

直後、輪廻の耳は複数の矢音を聞いた。

一番近くにいたゴアーシュを強引に地面に倒す。

「痛つ！ 何だい突然！」

ヴァージニアはヴィセンテが木に押し付けて背中でかばつていた。

少し遅れて矢が山なりに飛来する。

咄嗟に対応できなかつた者、対応したにもかかわらず運が悪かつた者が何人かその犠牲になつた。

輪廻の伏せているすぐそばにも矢が刺さつていた。

次に輪廻に聞こえたのは仲間たちの怒声と、敵軍の突撃する音。

「狼狽えるな！ 体勢を立て直せ！ 押し返すぞ！」

それからは一気に白兵戦になだれ込んだ。

輪廻はすぐについチを切り替えると、剣を抜いて敵の中に突撃した。

「おいおこマジかよ……！」

ヴィセンテがそうぼやきながら輪廻の後に続いた。



## 8・黒の森(後書き)

愛型「俺の出番まだ?」  
シャロ「まだですー」

## 9・雛鳥たちの戦場

雨のような矢の攻撃を受け混乱した二番隊だったが、なんとか体勢を立て直してからうじて敵の突撃に対応していた。

熟練兵たちが先陣に立ち敵の隊列に斬り込んでいく。輪廻はその最前列に飛び込んでいた。

熟練兵たちが、ただの新兵である輪廻が最前まで出でることに驚きを見せていた。

輪廻は素早く目の前の男に斬りかかった。

剣を打ち合おうと構えていたが、防御の隙間を狙つて胴を斬る。が、輪廻の剣は相手の鎧とぶつかって、傷を与えるに至らなかつた。

(鎧！ 面倒なものを着込んでやがる)

しかし輪廻の鷹のような動体視力は返す刀で鎧の隙間、相手の喉を狙つて適切に切り捨てていた。

「うう……」

相手がうめき声を上げて倒れた。血が吹き出している。

人体を切断した感触と血の匂いで、今まで眠っていた輪廻の心が激しく騒ぐ。

高揚感。

命の危険と隣り合わせの場所で未だ自分は生きているという充足感。

輪廻は熱狂的に戦闘に没頭した。

輪廻が狙つたのは首と手足である。

帝国軍と王国軍兵士が身につけている鎧は全身を覆うものではなく、胸の前面と肩の傷を防ぐための簡単なものであるのが幸いした。

しかし一人目、三人目と切つて捨てたところでは、輪廻は違和感を覚えた。

（こじつら、突撃してきた割にはずいぶんと防戦的だね… 一体何を企んでるのかしら）

輪廻は敵と一度も剣を打ち合わせていなかつた。

これは打刀を使つていたころの戦闘経験による癖であつたが、他の味方たちは斬り合つばかりで一進一退であつた。

輪廻と対した敵も、輪廻がたちまち三人を切り殺したのを見てまともに切り結ぼうとせずに仲間で固まつて剣先で輪廻を牽制し続けてゐる。

（時間稼ぎ…かしら？）

ということは、撤退を前提に戦つているのか？

奇襲を受けて混乱していた王国軍だったが、帝国軍が奇襲をした割には攻勢の意志が薄いことと、帝国軍の数が王国側よりも少なかつたことで、両軍は互角の戦闘を繰り広げていた。

輪廻の読みは当たつた。

帝国軍が後退を始めたのである。

しかし混乱し乱戦状態にあつた王国軍は、そのまますなずむと引きずられるようにして帝国軍の追撃を始めた。  
輪廻も、戦列の隙間を作らないために積極的に敵に前進し続けていた。

いや、前進せざるをえないといつ状況である。  
ただでさえ乱戦状態で王国軍は陣形の体を成していないのだ。  
下手に後退すれば帝国軍が反転攻勢してきて隊列をずたずたに引き裂かれるおそれがあつた。

やがて帝国軍が完全に撤退し、姿を消したところで、王国軍は追撃を止めた。

反転攻勢はなかつた。

ヒルマン隊長はほつと安心して、全隊に部隊の再編を命じた。

「ラティ、大丈夫か？」

輪廻が振り返ると、ヴァージニアが立つていた。

鎧が半分泥だらけだつたが、一見したところ怪我はなしそうだつた。

「ヴィセンテ・ゴアーシュは？」

「分からんが無事だらう。あのとき前に出てきたのは私たちだけだ」「君は？」

「斬り合いの最中に木の根に足を取られて転んだだけだ。今はもう落ち着いた。大丈夫だ」

ヴァージニアは輪廻の鎧と剣についた返り血を見ていたが、何も言わなかつた。

その時である。

二番隊の斜め左前方から矢の一斉射撃が飛んできた。  
三回の射撃の後、そちらの方向から最初のものとは別の帝国軍部隊  
が突撃してきた。

臨戦態勢にあつた王国軍は最初ほどの混乱はなかつた。

しかし今度は、輪廻は冷静に戦場を眺めつつ、味方の援護をするよ  
うに最前列を縦横無尽に駆け巡る。

「ヴァージニアー！」

敵と鎧迫りになつたヴァージニアの背中を守つて敵と斬り合つ。  
すぐに翻つてヴァージニアと相対していた者の腕を切り捨てる。

「ラテイ、すまない！」

「あんまり前に出ないで！」

先ほどのこともあつて、輪廻は敵の追撃には消極的だつた。

一度最前線から下がり、戦場全体を見渡す。

数の上では王国軍が有利であるが、戦況自体は互角である。

（……いや、互角じゃない）

何故なら帝国軍には、最初に遭遇した部隊がまだほとんど無傷の状  
態で残つてゐるのである。

いや、それどころか敵に増援がないという保証はない。

森の中は見通しが悪く、仮に伏兵が隠れていたとしても見つける  
は困難だろう。

輪廻は帝国軍の攻勢をその中心部で支えているアブリル隊長を見た。右手にロングソード、左手に短剣を持ち一人の敵と同時に斬り合っている。

「ひるむな！ 持ちこたえろ！」

隊長の怒声が森に響く。

それに呼応する形で、隊長の腹心たちが一気に前進する。

一部の仲間が前進することで、戦線自体が帝国領側へ押し上げられていた。

「隊長！」

輪廻は隊長の元へ走ると、周囲にいた敵をすれ違いに素早く切り捨てる。

一人目、二人目と切ったところで、三人目はレザーアーマーが致命傷を防いだ。

鍔迫りになりかけたところで、輪廻は三人目を蹴り飛ばし、喉に剣の先を突き刺した。

「隊長！」

「やるな新米！」

隊長は敵と激しく剣を打ち合わせ、敵の剣が跳ね上がったところで、短剣を振つて急所を狙つた。

輪廻と隊長は、共に敵の返り血で真つ赤になりながらも、焦ることなく、ゆっくりと敵の方へ前進を続けた。

「隊長、このまま前に行くのは」

「うるさい。新米は自分のケツだけ見ていろ」

隊長はそう答えるながら、敵兵が剣先を向けて走つてくるのを軽くいなしていた。

隊長が一步踏み込んで斬りかかるうとしたところで、敵が剣を合わせながら大きく後ろに下がる。

やがて、敵軍全体が後退を始める。

改めて、実に統制された後退であると輪廻は思つた。

アブリル・ヒルマンが前線で戦つようになつてからすでに五年。黒の森の戦場など自分の家の裏庭のよつたものだ。

アブリルは士官としての高等教育など受けてこなかつたが、軍隊を動かすためのいのちは実戦での先任の隊長の手腕を見て学んでいる。それゆえに、帝国軍の動きが王国軍を誘つたための罠であることは今さら輪廻に指摘されるまでもなく理解していた。

（んなこたあ分かつてるんだよ、分かつてるんだが、こいつするしかねえだらうが…！）

一見すると王国軍の方が多勢であったが、実のところ、アブリルが把握できているのは一番隊だけで、五番隊との命令系統の統一が未だにできぬでいた。

このような状態では軍全体に統制のとれた作戦行動を命ずることができず、その結果王国軍は戦場のあちこちで遊兵を生んでいる。王国軍の実数は帝国軍と同数か、ひょつとするとそれ以下かもしれ

ないのだ。

このようなバラバラの状態では撤退すらままならない。  
犠牲を出さない撤退こそ、用兵においては極めて高度な作戦行動の  
ひとつだからである。

二番隊だけならばともかく、今の状態でそんなことをすれば、五番  
隊との連携の隙を突かれて多大な出血を強いられるだらう。

否、もしも今すぐに撤退できるのならばその出血は払つべき代償で  
ある。そう考えることもできた。  
しかし敵の行動は悪辣である。

敵は常に、王国軍が前進することがもつとも出血が少なくなるよう  
な状況を作り、王国軍を帝国領の奥深くまで誘い込んでいるのであ  
る。

今のところ前進することそのものでの兵の損失は少ない。  
だから、このまま敵を追撃してゆけば、いつか敵が隙を見せるので  
はないか。

撤退のリスクを考えれば、どうしてもその希望が目の前にちらつく  
のだ。

それゆえに、アブリルは撤退を命じられずにいた。

（くそつ、どうかしてるぜ。戦場に楽観主義なんか通用しねえ。こ  
うなつたら部隊の一割は犠牲にする覚悟で全力で後退するしかない  
ー）

そもそもこれは、軍をあちこちに分散し、各隊隊長の面子を守るた  
めに命令系統の統合すら嫌つた王国軍司令官の失点であると言えた。

しかしながら、司令官の行動を止められなかつた自分にも責任がある、とアブリルは思つていた。

「留守番部隊」と揶揄される「一番隊」とはいえ、隊長は隊長であり、部下を守れない士官に上層部の責任を追求する資格はない。

王国軍の斜め右前方から最初にぶつかつた敵軍が現れて、弓の斉射の後に突撃してきた。

王国軍がそれも退けると、今度は斜め左前方から、二番田の敵軍が再び現れて、またしても弓の斉射の後に突撃を仕掛けた。

帝国軍が後退する度に王国軍が前に引きずられる。

四度目の突撃を退け、アブリルが撤退命令を出す直前。

隣で一緒に戦つていた輪廻が、たつた一人で敵の部隊に突撃した。

帝国軍少将、ベニード・ウォルコップは作戦の成功を確信していた。副官の忠告を受け、敵が想定外の行動をとつた場合、直ちに作戦を中止して撤退する準備ができていたが、どうやら杞憂に終わつたようである。

少将の立てた作戦は単純である。

まず王国軍へ諜報活動を行い、帝国軍の動きについてのデマを流す。狙い通り、王国軍はその真偽を確かめるための偵察部隊を派遣した。また、以前から帝国軍は継続的に森の北部の拠点に圧力をかけており、そちらに王国軍の一個部隊を釘付けにすることに成功した。

これで、王国軍を各個撃破する準備が整つた。

戦略目標としては王国軍の戦力を削ぐことにある。

まず帝国軍の部隊を3つに分ける。

1つは王国軍の偵察部隊の攪乱と陽動を行う部隊である。狙いとしては偵察部隊が本部に引き返すのを妨害するためである。

残りの2つが右翼部隊、左翼部隊として、敵本部の右前方、左前方にそれぞれ位置する。

一方が射撃、突撃、後退を行い、敵部隊を引っ張ると、その側面からもう一方の部隊が射撃突撃そして後退を行つ。

つまり2つの部隊が交互に王国軍とぶつかり、敵軍を精神的に消耗させつつ、補給線の届かない帝国領内へと敵を引きずり込むのが最終的な目的である。

ウォルコップ少将の計画では、ある程度帝国領内への誘導が完了した後は、最初の攪乱陽動部隊とも合流し、敵を孤立無援にし包囲殲滅することになつていた。

だが当初はウォルコップ少将の部下においてもこの作戦の脆弱性を指摘する声があつた。

ウォルコップ少将は士官学校上がりで実戦経験に乏しく、本作戦も言つなれば「机上の空論」であると見る向きが強かつたのだ。

しかしながら、アブリル・ヒルマン率いる二番隊と五番隊後方部隊との不和や、二番隊が兵員補給をした直後で練度が低かつたことなどの幸運が重なり、ウォルコップ少将の「机上の空論」は空想がそのまま具現化したかのような理想的な効果を示していた。

「王國軍恐るるに呪わす！ 未だに王族にかしづくだけの下等文明  
よー。」

ウォルコップは喜色満面で部下に漏らす。

自分の作戦がどのような幸運のもとに成功したのかは知る由もない。

ウォルコップ自身は左翼部隊にて前軍の指揮を執っていた。

右翼部隊の後退を確認してから、長弓部隊に射撃の用意を号令する。

「構え  
」

そのときである。

まだ若い、男の王國軍兵士が、たつた一人で飛び込んできた。

帝国軍の左翼部隊が輪廻の単身突撃を確認したとき、すでに長弓兵を2人斬り殺していた。

素早く視線を動かして、敵兵の分布と、大将の位置を確認する。

「う、撃て！ 撃てえええ！」

敵の大将と思しき男が叫ぶと、部隊の前方に展開していた弓兵たちが一斉に輪廻に弓を射つた。

雨のような矢を、輪廻は斬り殺した弓兵の死体を盾にして防いだ。

「あ……」

第2射をつがえるよりもずっと素早く輪廻は飛び出している。疾風のように帝国軍の隙間を縫つて走ると、その後ろには斬られて血を流した兵士たちの屍が並んでいる。

戦場は地獄などではない。

地獄を作るのは輪廻である。

「重歩兵隊前へ！」

帝国軍部隊の司令部へ肉薄する寸前に、後方に下がっていた歩兵隊が前に出て輪廻を囲む壁になつた。

退路を完全に塞がれたが、それでも輪廻の動きによどみはない。四方八方からの切り込みを蝶のようにかわしつつ、少しでも隙を見せれば容赦なく切り捨て、隙がなかつたとしても、輪廻の剣技の前には裸で立つているも同然である。

「囮め！ 押しつぶせ！ たつた一人で戦局を変えられてたまるものか！ 右翼部隊を呼び寄せ！」

そう叫んだ司令官ベニード・ウォルコップはその瞬間意識をねじ切られた。

輪廻に続き単身で飛び込んできたアブリル・ヒルマンが、帝国軍が輪廻に気を取られている隙に一瞬で司令部まで滑り込むと、司令官の頭蓋を一太刀で半分にスライスしたのである。

倒れた司令官の死体からは異様な匂いが立ち込めていた。もはやそれが司令官だったのかどうかも分からない。

上官の脳髄が地面に撒き散らされたのを見て、副官たちの間にじびよめきが走った。

やがてそれは、アブリル・ヒルマンへの恐怖に変わる。

「さあどうした。頭を叩き割られたいのはどいつだー?」

それから1時間後、帝国軍は全軍が敗走し、王国軍もそれを追撃することなく王国領内への帰還を果たした。

たつた一人で帝国軍の左翼部隊に致命的な傷を負えた輪廻とアブリルだったが、ほぼ無傷の状態で本部に帰還し、戦友たちを驚かせた。

帝国軍も王国軍も同数を減らし、全体の戦果としては王国軍がかるうじて収支が正になる程度であったが、この先王国軍が支払わされていた出費を考えれば十分すぎる結果だと言えよう。

また、輪廻だけではなく、ヴァージニアたち三人もこの戦闘では一命を取り留めた。

離鳥たちは、無事に初陣を生き延びたのである。

## 9・雛鳥たちの戦場（後書き）

アヴリル「なぜ私を連れて行ってくださらなかつたのですか……夜  
一様……」

帝国軍を撃退した夜、二番隊と、偵察から戻った四番隊と五番隊とが合流した。

偵察部隊と行動を共にしていた東部方面軍総司令のマイルズは、二番隊の奮戦を聞き、興味のない素振りで頷いた後、日課の入浴のために湯を沸かすよう部下に指示した。

東部方面軍の家を守つた二番隊の戦闘の、戦略的な価値を理解できていなかつたのである。

よつてアブリル・ヒルマンが推薦したラディ・ダールトンの進級についても実現することはなかつた。

「何が特進か……新兵をむやみに進級させては秩序が保てぬ。たかが引き分けただけの戦闘の何が功績か」

マイルズは風呂のための専用の小屋（こわゆるスチームサウナ）を建てさせていた。

戦場では貴重な水を使い、風呂に入り、補給部隊に特別に発注した

ぶどう酒を飲み、自分の地位を噛み締めていた。

着任初日の新兵が、敵襲のさなかにあつて軍神の「じぐく」活躍したことは二番隊の話題をさらつた。

たつた半日でラディ・ダールトンの名を知らない者は二番隊にはい

なかつた。

ちなみに輪廻の活躍をもつとも喜んでいたのは、ヴィセンテである。下級兵用のテントで休んでいたヴィセンテが輪廻の肩を力強く叩いた。

「強い強いとは思つてたが…ここまでとはさすがに思わなかつたぜ」「かなり、際どいところだつたけどね」

輪廻はそう言つて、ヴィセンテに自分の右腕の袖をまくつて見せる。包帯に血の赤がにじんでいた。

敵の部隊に突入り乱戦したときの傷である。いつ致命傷を受けてもおかしくない。決して安全な戦いではなかつたのだ。

「しかしまあ、生きてて良かつたな」「そういうヴィセンテはどうだつたの？」「どうすればいいか分からなくて、あらあらしてこいつに終わつちまつたよ」

そこにゴアーシュがやつて来て、一人の隣に腰をあらした。

「大活躍だつたそうじやないか。さすがラティ・ダールトン。僕の親友だ」

「おいお前いつから親友になつたんだ？」

「そういえばゴアーシュは？　ずっと見なかつたけど」

「貴族たる僕の役目は後方から戦場全体を眺めることや」

「そりやつまり後ろでブルつてたつて」とじゃないか

「ヴィセンテが冷めた口調で言つて、ゴアーシュは顔を真赤にして声を荒げる。

「ししし失礼な！ ほ、僕はシュトラウス家の人間で、5歳から剣の英才教育を受けた競技剣術のチャンピオンだぞ！」

「じゃあお前一体何してたんだよ」

「だから後方で」

「剣士が後方にいてどうすんだよ。お前の剣はそんなに長いのかよ」「まあいいじゃないヴィセンテ。誰だって初めてはうまくいかないよ」

輪廻が何の氣なしにそつまつと、ヴィセンテとゴアーシュが同時に振り向いてぎょっとする。

「つーかお前がおかしいんだろ。何でいきなりそっぽんぽんと人が斬れるんだよ」

「そ、そうだよ。君、本当に一体どこで剣を習つたんだい？」

「というかお前、絶対初めてじゃねえだろ」

「そ、そんなことないよ。ほら、ヴァージニアだつて、初陣なのにちゃんと前で戦つてたじゃない。ねえ、ヴァージニア！」

輪廻は部屋の隅で足を拭いているヴァージニアに声をかける。ヴァージニアはちらりと三人の方を向いてから、何も言わずに視線を戻してしまつ。

「……ご機嫌斜めなのか、疲れてるのか、俺には分からん」「本当に ただの偶然だよ。たまたま軍神が降りてきたんだ」「ふつ。そういうことにしておいてあげるよ」

ゴアーシュが金色の髪を搔き上げる。

ヴィセンテはその仕草を胡散臭そうに見ていた。

夜中、輪廻は一人で基地の外に出ていた。  
空は真っ暗で、駐屯地のあちこちに並んだ松明がぼんやりと森を照らしている。

ときおり見張り番の兵士たちが基地の周囲を巡回しているのが見える。  
常に誰かが起きていて、敵の襲来に備えているのだ。

本来ならば昼の任務に備えて夜はすぐに寝るべきであつたが、輪廻はなかなか眠れる気分になれない。

木の根元に腰を下ろしてぼんやりとしていた。

輪廻は自分の剣を抜いて刃を月にかざした。

曇った夜を背景にフェルミナ金属の刀身がぬるりと光っている。

世辞にも名刀とは言いがたい。

魔女の力で大量に加工されるフェルミナの剣は、切れ味を犠牲に、  
奇跡的な軽量化と大量生産を実現した。

生まれ変わる前に使っていた懐かしき愛刀とは比べるまでもないが、  
しかしこうして夜月に照らすとそれなりに美しく見えるものである。

異世界の月は、一見して故郷の月と何も変わらないよつと見える。

（……月だけじゃない。わたしがここでやつてこないとだつて、前と何も変わっちゃいない。ただの人斬りだ）

氣配がして輪廻は剣を鞘に収める。

振り向くとヴァーチニアの姿があつた。

「ここで何をしていの？」

「別に何も」

すいぶん深く心の奥に沈んでいたので、輪廻の声色は意外なほどこそつくなくなつた。

ヴァーチニアは輪廻のそばに立ち、視線をしばりへ輪廻と森の間でうるうると彷徨わせてから切り出した。

「「ホン……ここ、いいか？」

「何が？」

「隣に座つてもいいかと訊いたのだ！」

「ど、どうぞ」

そうか、と満足そうに頷いて、ヴァーチニアは輪廻の隣に腰を降ろした。

しばりへ無言の一人。

「あの……」

「な、何だ？」

輪廻が話しかけると「ヴァーチニア」はびくっと反応する。

暗かつたが、輪廻の目は「ヴァーチニア」の顔の細かな部分まで鮮明に捉えている。

「お前、ずいぶん活躍したな」

「… そうかな」

「古参兵たちもみなお前の話をしているぞ。初陣でああも活躍できる奴はいないだろう」

「ヴァーチニアだつて」

「私は……何もしていない」

搾り出すような声である。

「初めて敵と剣を合わせたとき手が震えた。恐怖で逃げ出しそうになつた。……結局私は、一人も殺せなかつた

「そう……」

「だがお前は違つた。何故だ？」

「何故、つて」

「どうしてためらいもなく人を斬られる？」

「僕だつて、人を斬るのは怖いよ

輪廻は嘘を吐いた。

人を殺して感傷に浸つたことはない。

しかし「ヴァーチニア」はそれ以上の追求はしなかつた。

(見透かされてるのかしら…)

「ラディ。私は、人を斬るのが怖い。今までずっと軍人になるための努力をしてきた。剣の腕も、誰にも負けないつもりだった。お前に会うまではな。だが今、私はたまらなく怖い。どうすればいい? どうすればこの恐怖はなくなる?」

「…無理に人を斬る必要はない。その時が来れば、斬らなきゃいけなくなる。だから今は」

「ラディ! 私はお前と一緒に戦いたいんだ。私はお前の背中を守れる戦士になりたいんだ……だから……」

輪廻はヴァージニアの手を握った。

彼女はハツとして輪廻を見る。

もはや輪廻は、自分が今は男の体であることを忘れていた。

「…たとえヴァージニアが人を斬らなくとも、君は僕の仲間だよ。だから」

(どうせだから、あんたはそのままでいなさい)

輪廻はヴァージニアの手を離して立ち上がる。

「それじゃ、おやすみ。ヴァージニアも早く寝た方が良いよ

あぐびをかみ殺しながら輪廻はテントに戻った。

翌朝輪廻は隊長のテントに呼び出された。

アブリルは立派な木の机に行儀悪く尻を乗せて足を組んでいた。

すらりと伸びる長い足は陸戦の兵士としては不思議なほどに色が白い。

一年中太陽が陰る、黒の森で戦つ兵士の特徴である。

隣には補佐官のリングドが控えていた。

「リングド。下がつていろ」

リングドは黙つて一礼するとテントを出た。

アブリルとは不釣合いなほどに寡黙である。

すれ違つとき、リングドが輪廻の横顔をちらりと見たのが分かつた。

リングドが出ていつたのを確認して、アブリルは口を開いた。

「セヒラティ・ダールトン。何はともあれ、まずはお前を褒めてやる。昨日はよく戦つたな」

「それは何度も聞きました」

「人が褒めてやつてるのにもうちょっと嬉しかったんだ」

「……恐縮です」

「くふふふ。オレは嬉しいぞ。お前は雛鳥なんてショボい鳥じゃないな。巨鳥グイードかドルホルノか。どちらも伝説の鳥だ。お前はお前を何にたとえられたい?」

アブリルは嬉しそうに笑つてゐるが、輪廻はどんな表情をすべきか分からぬ。

愛想笑いでもすればいいのか？

「あの、話が見えないのですが」

「ああ？ お前人の話聞いてるのか？ 喩え話だよ。お前は少なくとも離鳥じやない。じゃ何なのかとこいつひとを、オレはお前に聞いているんだ」

「何なのかと言われても、ただの兵士ですよ」

「はつ。つまんねー男だ。でもまあそういう簡潔なところは嫌いじゃないな。軍司令部の貴族共に比べれば」

「……あまり軍を批判するような」とを言つと、反逆罪で捕まりますよ」

「いじにはオレとお前しかいねえじやねえか」

「いえ、僕がいるから、言つているんです」

なははは、ヒアブリルは爆笑した。

「ねーよ。お前はオレを売らない。それとも、オレを売つて、一番隊の隊長になりたいか？」

「なりたいと言つたらどうします？」

「お前を殺す。… どこの話は冗談にしても、お前に隊長としての能力があれば、お前が望もうと、嫌がろうと、お前を隊長にするさ。軍つてのはそういうところだ。オレだって、なりたかったから隊長になつたわけじやねえしな。たまたまオレが最強だつただけだ」  
「そうですか……。では隊長は、どうして軍人になつたのですか？」  
「借金取りから逃げてきた」

(ああ……なるほど)  
思わず納得する。

何がどう「なるほど」なのか、輪廻自身つまく説明できなかつたのだが。

「隊長なら軍人でなくとも何でもできそうですね」

「そりゃどういう意味だ?」

「才能に溢れている、ということですよ」

「褒めてるんなら不要だぜ。強いてのは聞き飽きたし、当たり前すぎて何の意味もない。お前、『あなたは人間ですね』って言われて嬉しいか?」

「強いだけじゃなくて、隊長はすごく可愛いですよ」

ズテン!と隊長は盛大に机の後ろに倒れた。頭から床に落ちて、足だけが見えていた。

やがて立ち上がると真っ赤な顔をして輪廻の方を見た。

「な……な……か……ひ……ぐ……」

パクパクとアブリルの口だけが動いて言葉が出ていない。

驚いたのは輪廻である。

まさかここまで過剰に反応されるとは予想外すぎた。

(「この女に言こぐるめられるのが嫌で反撃してみたつていう軽い気持ちだったんだけど……」)、効果観面ね)

輪廻は自分が、密観的に見て女たらしのものであることを自覚し始めていた。

(昨日の「ヴァージニア」とい、今日の「この女」とい、わたしは一体何をやっているのかしら)

とはいって、アブリルの外見が可愛いことは事実である。輪廻がいさか嫉妬を覚えるくらいには。

せめて剣の腕だけでは勝りたいものだと輪廻は思った。

それから長い時間をかけて、アブリルは普段の自分を取り戻した。

「ん。悪かったな。さて、何の話だ？」

「いえ。本題にはまだ……」

「そうだった。本題だな」

アブリルはじつと輪廻の顔を見つめる。

「喜べ。今日からお前はオレとチームだ」

黒の森のずっと北の平原で、帝国軍中将カリナ・エーデルといールズが話していた。

二人はそれぞれの馬に乗り、イールズは荷物を載せたもう一頭の馬を手綱と逆の手で握っていた。

カリナはずつと地図を睨みつけている。

ときおり顔を上げては地平線の方を見つめる。

「………… オイ」

イールズが低い声で話しかける。

カリナはイーデルの方を向いて彼の疑問に答えた。

「道に迷いました」

「三日も馬で歩き続けて未だに草原しか見えないことを考えれば子供でも分かる事実だな」

「おかしいですねえ…」この道で良かつたはずなんですが」

「どこのがだよ！　ていうか道ねえよ！　見渡すかぎりの草原だよ！　森どこだよ！」

びゅうと冷たい風が吹くと、一人のいる草原が波打つた。正しい道のりであれば通るはずのない草原である。

あはは、とカリナは乾いた笑い声を上げる。

イールズは頭を抱える。

「……つーかなんで一人だけなんだよ」

「ただの交代人事なんですから仕方ありません。それに私の護衛はあなたがやつてくれます」

「あんたがふらふら変な道を進むから、もう何回も盗賊に襲われたしな」

「あなたの活躍はしつかりと見せてもらいましたよ。戦略兵器の名に恥じぬ腕です」

「お前はただ立つてただけだつたな」

「自慢ではありますんが私は剣で鶏肉を切ることもできません。ちなみに教練では剣の成績は最下位でした」

「ほら、地図を寄越せ。ここからは俺がガイドをやる」

「あ、ダメですよ。進路を決めるのは私の仕事ですから。戦闘も先導も部下に任せてしまつては上官としての立場が」

「いいから寄越せ！」

帝国軍の新しい士官は、未だ黒の森に到着していなかつた。



輪廻「また、つまらぬ者を斬ってしまった」

アブリル・ヒルマンと輪廻、ヴァージニア、ヴィセンテ、ゴアーシュの五人は、同じチームとして活動することになった。

これは、新兵三人を、実力者であるアブリル、輪廻の二人がカバーすることを狙っていた。

アブリルの経験上、一番隊の死者の半数は配属されたばかりの新兵である。

普通は新兵をひとつずつチームに固めたりはせずに、それぞれのチームの古参兵が新兵の面倒を見るという形になっていた。  
だがこのところの戦闘で古参兵の戦死と他の部隊への転属命令が続出し、もはや従来の編成が破綻しかけているところであった。

ところが今回は、輪廻という超の付くほどの技量の持ち主が一番隊に来たため、このような配置を思いついたのである。

「……というわけだ、ラティ。お前はオレの補佐をやれ。副班長だ。  
せいぜい役に立てよ」

「いいんですか？ 隊長自らが前に出て」

「オレが死んだらリンドが指揮をとる。それにオレとお前の腕だ。  
そうそう死ぬことはないだろ」

「……そんなに楽な話じゃないと思います。殺し合いですかから」

「殺し合いなんて甘いもんだぜ。それが分からねえからお前はまだ

成鳥になれねーんだよ

翌日、アブリルは一一番隊全員に対して、正式にチームの再編成を宣言した。

ちゅうじやの日、王國軍東部方面軍に対して、帝国軍の拠点であるアンアディール要塞の攻略作戦が発令されたのである。

一一番隊のチームリーダーたちに対しても、作戦の概要を説明した後、アブリルは自分のチーム全員をテントに集めた。

輪廻は他の仲間の表情を横田で見る。

ヴァージニアはいつもの通りの無表情だつたが、ゴアーシュは美女二人と同じチームで戦えるのが嬉しいのか喜色を隠せていない様子である。

ヴィセンテは一一番隊の隊長を田の前にして居心地悪そうしている。基本的に、ヴィセンテは上官とか上司の類が苦手なのである。

「まあ簡単に説明すると」

アブリルは机に地図を広げる。

ちなみに隣では補佐官のリンドが書類仕事を黙々とこなしていた。

「オレたちは陽動部隊だ。まっすぐ前進して、敵部隊と交戦して釘付けにすればいい。要塞の攻略は別の部隊がやることになつてる。別に難しいことじやねーだろ」

アブリルの口調は投げやりだ。

要塞攻略の仕事を精銳の四番隊に取られて機嫌が悪いのである。

「本当ならこのチームでの特訓をするべきなんだろうが、あいにく時間がない。お前たちは一応、一度は実戦を経験しているわけだし、オレとラティがサポートにつくから、なんとかやってくれ。…何か質問は？」

「……どうしてラティがあなたの補佐なのですか？」

質問したのは、ヴァージニアである。

「何だ？ オレの人事に不満か？」

「いえ、そういうわけでは……」

「理由なら別に難しいことじやない。オレがこいつを気に入つたからだ」

「『気に入つた』」

「

機嫌が悪いのでなおざりな答だった。

気に入つたというよりは、単に輪廻の剣の腕を買つての人事である。

しかしヴァージニアは、アブリルの中途半端な説明を聞き、ぎりりと唇を噛み締めている。

「ふふ、隊長の『期待に添えられる』誠心誠意戦います」

と、威勢のいい返事をしたのは「アーシュである。だがアブリルの反応は冷たかった。

「戦いに誠意なんざいらん。とはいえる前の噂は聞いてるぞ。競技剣術ではそれなりに鳴らしたらしいな」

「はい。隊長の背中はこの僕がお守りいたします」

「それはラティがやるから必要だが……ま、あまり己の腕を過信するな。お前みたいなのが一番死にやすいんだ。オレの経験上な」

「はい……」

「シュトラウスね。名門貴族がなんでこんなとじりにいるんだ?」

「あ、あの……それには色々と事情が……」

「ま、オレにはどうでもいいことだが」

「すみません……」

「アーシュの熱がどんどん下がっていくのが見て分かつた。そういえば、とアブリルはヴァージニアに視線を向ける。

「キヤスカート家の」令嬢もうちのチームだったな。ははっ、よく考えたらすげえチームだ。お坊ちゃんにお嬢様か。政治力だけは百点だな」

「家は関係ありません」

凛としてヴァージニアは言った。

アブリルがヴァージニアの顔をじつと覗き込む。

「あん? 何だお前、家出してきたのか?」

「違います。それに、お嬢様などと呼ばれるのは心外です」

「ははっ。プライドを傷つけちまつたかな? しかし悲しいかな、プライドってもんは力がなきゃ守れねえものなのだ。お前はどうだ?」

「力で示せとおっしゃるのですか？」

キッ、ヒヴァージニアはアブリルを睨んだ。  
はつはつはとアブリルは可憐な外見に似合わぬ豪快な笑い声をあげる。

「いいぜ。だつたら今から臨時訓練だ。お前たちのプライドを  
へし折つてやる。全員、装備を整えて表へ出い！」

「隊長！」

事態がとんでもない方向に行きかけて、輪廻は慌てて声を上げる。  
しかしアブリルは一顧だにしなかつた。

「いいんだラティ。ところがオレは、お前と一緒にやつてみたかった  
んだぜ」

凶暴な笑顔を向けて、アブリルは小声で輪廻に答えた。

カリナ・ホールが第3師団に向流したとき、王國軍はすでに不審な動きを見せていた。

着任早々カリナは会議室に部下を集めた。

司令部は、黒の森の後方の安全な地帯のとある古城に置かれていた。  
配下の斥候と諜報員から集めた情報を地図の上に並べる。

第3師団の幹部たちがカリナに向ける視線には、好奇か、嫌悪か、軽侮かのいずれかが含まれている。

それを敏感に感じ取つたイールズが敵意を剥き出しにしかけたが、カリナはさりげない仕草でそれをたしなめる。

その程度の反応はこれまで何度も経験済みだった。

（…アンタがそうじろつていうなら、俺は何もしないぜ）

イールズはやれやれと手を上げて、部屋の壁にもたれて腕を組む。  
「なるほど…王国軍のこの部隊に、森を進軍する兆候が見られると  
いうことですね」  
「眞面の我々の仕事はこれを撃退することありますよ」

下士官の一人が穏やかな口調でカリナに言った。

しかしカリナは眉を寄せて黙つて考え始める。  
やがてポンと手を打ち、次に発した一言が一同を驚かせた。

「いつの師団から他所に増援を送りましょう」

「お待ちください…要請もないのに増援を送るなど…それに増援を送つたら、森の王国軍はどのようにするのです…？」

「ああ、どうせ森の部隊は陽動なので、それほど気にしなくても大丈夫だと思いますよ」

「なぜそう思われるのです？」

簡単ですよ、とカリナは退屈そうに答える。

「森に進行してきた場合の、敵の戦略が意味不明です。仮に戦術的に森を攻略、制圧したところで、王国軍の補給線の関係上、維持することができないからです」

「しかし陽動であるという確かな証拠は？」

「そう考えた場合の敵の真の狙いは、戦略上の要所であるブリックス街道か、補給の拠点となるアンアディール要塞のどちらかです。この一つは、こちらの部隊が森に釘付けにされたとして、わたしたちが陽動に気づいて引き返しても、ぎりぎり陥落までに間に合わない距離にあるからです。逆に、それよりも遠い場所を狙っているのであれば、わたしたちに対して陽動を仕掛ける意味がありません。他の師団が駆けつけますからね」

「ことじこじ」とカリナは地図を指す。  
事実、王国軍にはそれら帝国の拠点を攻撃するだけの兵力が近辺に存在する。

「大穴でこちらの司令部を直接衝いてくる可能性もありますが、向こうにそんな大博奕を打つ兵力はないでしょ。仮に失敗したら東側の防衛線が崩壊、帝国軍の大軍が王国領になだれ込むわけですか」

「しかし」

なおも異を唱える老下士官を無視してカリナは続ける。

「私の勘ではアンアディール要塞の方に来ると思いますよ。ここを落とせば補給線の問題が解決して、王国軍は黒の森を占領、維持し続けることができるようになりますから。戦況によっては黒の森の陽動部隊をアンアディール要塞の補給路を断つのに使うこともでき

ますしね

「勘だけで持ち場を勝手に離れるなど」

「もちろん勘だけでそんな危険は打てません。用兵といつのは安全に勝つことを目指していますからね…だから第3師団は、ブリックス街道とアンアディール要塞の両方に部隊を送ります」

「そんな暴挙が許されますか！ それでは王国軍の陽動部隊をどのように対処するのです」

若い下士官が大声で怒鳴った。

はあ、とカリナは曖昧な声で頷く。

「それについては」安心く、ださい。ポイントは、王国軍には最初から森を占領する意志がないということです。

「大体……あえて他の部隊の手助けをすることもありますまい。それでは我が部隊の功績が」

「森に足止めされると第3師団がまる」と遊兵になってしまいますよ。それでは戦場全体で帝国軍が数の上で不利になってしまいます。仮に要塞が落ちたら、森への王国軍の大攻勢の引き金にならかねません。そんなことになるよりは、ずっと良いと思いますよ」

他に質問は？ とカリナは一同を見る。

皆いすれも納得の行かない顔であつたが、異論はすべてカリナが受け流してしまった。

最終的には、

「……司令官殿がこいつおつしゃうれでいるのだ。仕方がありますまい」

「……」トール大佐の言葉に一同が頷き、カリナの案で部隊を動かすことが決定した。

不承不承な様子で下士官たちが退室してゆく。会議室にはカリナとイルズだけが残された。

「いいのかい？」  
「そんなことをしたら、手柄を他所に取られるぜ？」

「良いも悪いもないでしょう。軍人が、最善と思える采配をしなければ、それは罪です」

「いいのかなあ? ワンタ 春までは用紙をたてないと申しんた  
る?」

「敵を殺すのは大丈夫なのか?」

イルズが意地悪な顔で質問する。

カリナは、イルズがただ自分の味方をしてくれるだけの人間ではないことを理解していた。

さらにイルズは続ける。

「用兵つてのはいかに効率良く敵に血を流せるか、といひ」とこ

「それしか能がないものですから」「知恵を絶するモノがおんたに修業か

「あんたは部下を殺したくないという人道的な理由から、自分の出世を犠牲にする覚悟でいる。そのことと、敵の命を奪うことに、どうやって折り合いをつけているんだ？」

「……あなたが私なら、どうしますか？」

「俺は人を殺せればそれでいいんだ。まだ答えを聞いていないぜ。で、どうなんだ？ 敵は殺していいのか？」

「……帝国の皇帝陛下と国民を守るために、私は王国の人を殺します。

その罪から逃げるつもりはありません」

「上出来だ。安心しろ。アンタの手柄は俺が代わりにあげてやる」

イールズは何度か頷いて、飘々と部屋から出していく。

その背中に向かって、カリナは、

「生意氣」

と、幼稚な悪態をついた。

輪廻の田の前では、輪廻とアブリル以外のチーム全員が地面上に倒れていた。

ぜえぜえと荒い呼吸を繰り返している。

「くつ……お前たちまだまだ鍛錬が足りん……が……思った以上にはやるな。その点は認めてやるぜ」

訓練は熾烈を極めた。

「というか、ヴァージニアとアブリルがやたらと張り合って勝手に自滅したというべきか。

ちなみに、ガーゴー・シューとヴィセントはそれに巻き込まれた形だ。

輪廻は一歩引いたところから訓練を眺め、力をほとんど抜いた状態で参加していた。

「ふつ…… もてダートン。次はお前だ」

ふつと深く息を吐いて輪廻の方に向き直る。  
あれだけ走りまわり、斬り合い、それでもなお訓練を続けるのだから恐ろしい。

輪廻は剣を鞘に戻し両手を上げた。

「……変わった構えだな」  
「降参します」  
「なぜ？」  
「隊長の方が強いからです」  
「嘘をつけ」  
「いえ、本当」

輪廻が言いかけた瞬間、アブリルが一息で踏み込むと、下段から輪廻の顎に向けて剣を振り上げた。  
輪廻はそれを自分の剣で受ける。

鍔迫り。

アブリルと至近距離で見つめ合つ。

「てめえ…… 何が降参だ。オレが斬り込むよりも、両手を上げてたてめえが鞘から剣を抜く方が早いじゃねえか…… こんなデタラメや

つておいて、隊長の方が強いです、だと？」

ふざけやがつて、と苛立ちを見せつつも、アブリルは大人しく剣を収めた。

警戒しつつ、輪廻もそれに続く。

そのとき、ヴァージニアが体を起こした。

「……参りました。やはり隊長は、強い」「当たり前すぎて何の感想も出でこないが……まあ、そう落ち込むな。お前は新兵にしてはやる方だ」「今は勝てませんが。いつか必ずあなたに勝ちますー。」「良い気合いだ。楽しみにしてる」「そして……必ず取り戻します」

ちらり、と輪廻の方を見たのは、果たしてどういう意味だったのか。

その三日後、陽動作戦のため、一番隊と二番隊は黒の森への侵攻を開始した。

対するは、カリナ・エーテル率いる帝国軍東部方面軍第3師団。

そして 毒蛇。

## 11・アンアディール要塞攻略作戦（後書き）

輪廻「いい加減ヴァージニアを恋人と勘違いしている奴うぜえ。恋人じゃないし。シャルロットの方がよっぽど恋人」

ゴアーシュ「恋人じゃなつたらなんのよ」

輪廻「戦友：かな？俺はヴァージニアには萌えなんて感情は抱かないけど剣の筋に魅入られた」

ゴアーシュ「うわあ・・・」

アブリル「（；；；）・・・」

ヴィセンテ「（ノヽヽ）」

帝国軍の三度目の襲撃を受けて、一一番隊と二一番隊は密集隊形を組みこれを凌いだ。

散発的な射手による攻撃。

その後突撃の気配を見せるが、王国軍側が前進を始めるとすぐさま後退する。

「よつし止まれ！」

三番隊隊長、グレン・ホールナーが遠くまで響くバリトンの声で部下に指示を飛ばした。

ホールナーは三番隊の中でも頭ひとつ飛び抜けるほどの大男である。まるで丸太のような筋肉の塊の腕を振るえばひ弱な人間なら一、二人は簡単に吹き飛ばしてしまう。

しかしそうした外見とは逆に、戦場でのホールナーは常に慎重を期する性格だった。

むしろ、自分本来の攻撃性を知っているからこそ、理性の部分では全力でそれにブレーキをかけるようにしているのだ。

「一一番隊の隊長を呼べ」

しばしの黙考の後、副官にそう命じる。

数分後、アブリル・ヒルマンが戦場には似つかわしくないスレンダーな体躯と美貌を「コールナーの前に見せた。

アブリルはコールナーより一回りも年の若い女だったが、コールナー自身は他の三番隊の隊員たちとは違い彼女を高く評価している。

「ヒルマン。前進をやめて後退するぞ」

横柄にも聞こえる言い方は、コールナーの癖である。  
アブリルは極悪人のように表情を歪める。

「異論はあるか？」

「……ま、ねーよ」

「不満そうだな」

「異論はねーけど不満つつーか、疑問はある。敵がこちらの進撃を誘つてるのは明らかだ。ちょくちょく現れて攻撃してくる割には、こちらが近づくとすぐに下がる」

その点は今さら指摘されるまでもなく互いに分かつてこることである。

「気になるのは敵の数が少なすぎることだ。こっちは陽動で、全軍の半分もいねえってのに、それより少ないんだぜ？」この間の戦いみたいに伏兵がいるって考えるのが当然だろ

「同感だ。それで、何が不満なんだ？」

「あからさますぎるんだろうが。」これじゃあ疑つてくれと言つてているようなもんだ。前の戦闘であいつらを追い返してから何日も経つて

ねえのに、まつたく同じ手で来るつて、そりゃいへらなんでもオレたちを舐めすぎだ」

不機嫌なアブリルの言葉を、ホールナーは腕を組んで考える。

「……しかし、だからと書いて、このまま前進するのは敵の思う壺ではないか？ 仮に敵が伏兵を敷いていないとして、では敵の狙いは何だ？」

「それが分からねえからイラついてんだよ。大体、こっちの攻略作戦のタイミングに合わせて敵が妙な動きをしているのが気に入らねえ」

「敵にこちらの作戦が漏れたと言いたいのか？」

「……分かんねーけど」

「とにかく、このまま前進するのは犠牲を覚悟しなければならん。それに考え方を変えれば、敵がずっとこちらを狙つていてくれるのは陽動の上では好都合だ」

「……そうだな」

渋々といった様子でアブリルは同意する。

「後退すれば敵はこちらの後退に合わせて突出していくはずだ。それに対して逆撃を加えて一気に敵を殲滅する」

「王国軍は後退際に突出したこちらの部隊に逆攻勢をかけるつもりです。無理な突撃は避けて、距離を取つて射撃を続けましょう」

カリナ・エーデルはのんびりとした口調で部下に指示した。

王国軍の予想は核心に触れていたのである。

帝国軍東部方面軍第3師団は兵員の多くを他の師団へと派遣しており、現在黒の森で戦っているのは、師団の残存勢力のほぼ全軍である。

当然、王国軍が警戒するような、伏兵などの小細工を弄するだけの兵力も時間的余裕もなかった。

しかし陽動を行う王国軍の心理として、罷がないと確信するまでは無為な突撃は行わないだろうとカリナは予測していた。

万が一にも賭けに負けて王国軍が全軍を持って攻勢に出れば帝国軍は為す術もなく敗走させられてしまう。

もちろん最悪を避けるための第一案は用意していたが、王国軍の動きを見る限り当分その必要はなさそうである。

「なあおい。俺の出番はいつ来るんだ?」

槍を肩に載せ、退屈に耐えられないといった様子でイールズがカリナに話しかける。

「不測の事態が起きなければ、あなたの出番はありません」  
「ああそつかい。アンタがヘボ用兵家であることを祈るぜ」

イールズはふてぶてしく言い返す。

イールズの槍は「暗黒」と表現する他ない、真っ黒な槍であった。槍先から柄まですべてが一色である。

特殊な塗料を使っているのか、その黒は光を反射せず、影のよう見える。

イールズは立ち上がり、「影」を横に薙いだ。

カリナは槍の素人だったが、その姿にはわずかな違和感を覚える。

（なんだろう……まるで……「偽物」みたいな……）

イールズは準備体操のようにいくつかの格好で槍を扱った後、カリナに背を向けて歩き始めた。

「ちょっと待つてください！ どこに行くんですか」

「俺は俺でやりたいようにやらせてもらひや。敵の数が減るのはアンタにだつて悪いことじやないだろ？」

「司令官はわたしです。勝手に戦場を

「戦場はアンタだけのものじやない」

カリナに片手を上げて別れの挨拶をして、やがてイールズの姿は森の奥に消えていた。

小細工も虚しく、王国軍の誘いに帝国軍は乗らなかつた。

その後、帝国軍が前進しないことに焦れた王国軍が反転して再度攻

勢をかけたところ、それに合わせて帝国軍が擬似突出を行い、王国軍が慌てて後退しようとした混乱に乗じてしたたかに打撃を加えていた。

もともと王国軍は陽動であり負けないための戦いをしなければならない以上、行動は慎重を極めるのは必至である。

帝国軍はその慎重さを逆手に取り、自軍の不利な点について罷と思わせることにより王国軍の行動を完全に縛ることに成功していたのだ。

これは帝国軍の指揮官であるカリナ・エーデルが王国側の思惑を完全に読んでいたからこそ可能となつた基盤である。

王国側の指揮官も決して無能というわけではなかつたが、戦略面での裁量を与えられていない以上、目の前の敵に対して戦術的に対処するしかなかつたのである。

結果的に、王国軍は帝国軍の数倍の兵員を黒の森に釘付けにされたことになる。

この遊兵の差が、要所での戦場に必ず形となつて表れるだろうということをカリナは確信している。

その後も王国軍は帝国軍を誘い出そうと、あるいは罷を看破しようと躍起になつてはいたが、そのたびにカリナは王国軍の一歩先を読み、のらりくらりとかわしつつも積極的に新たな局面を引き起こすことによって王国軍に全面攻勢の機会を与えたかった。

王国軍と帝国軍の膠着状態が続く中、アブリル・ヒルマンはリンド

より、部隊の一部と連絡が取れなくなつたと報告を受けた。

「2度も伝令を送りましたが帰つてくる」とはなく、3度田口は「候を送りましたがこちらも消えました」

「…最左翼のチームか。敵の別働隊…つて可能性は、ねーよなあ  
「いくら森の中と言えど、別働隊の襲撃があれば捕捉できます」

「見えない軍隊…か」

「あるいは敵の特殊部隊」

たとえそうだとしても、誰一人逃がすことなく隊の兵士を全滅させたとしたら、その戦力は尋常ではない。

二番隊の仲間が殺された以上、アブリルはその「幽靈」を討伐する方法を考えなければならなかつた。

「……とりあえず、左翼の部隊を中心呼び戻せ。いくつかのチームでグループを作り、密集して動くように。それから念のため三番隊にも警告してやれ」

「こちらから左翼に部隊を送りますか?」

「そうしたいんだが……」

アブリルの返事は歯切れが悪い。

こちらの部隊を左側に向けさせることが帝国軍の狙いである可能性もあつた。

帝国軍の狙いが未だに分かっていない以上、ここはみだりに部隊を動かすことはできない。

「隊長」

そのとき、アブリルとコンドの会話を聞いていた輪廻が声を上げる。

「隊長、僕が偵察をしてきます」

「おいら『ティ』」

止めようとしたヴァージニアを輪廻は手で制した。

「大丈夫。見てくるだけだから」

「しかし……」

「ちょっと待て。お前らだけで話を進めんな。隊長のオレがまだ許可してねえだろが！」

「許可しないんですか？」

「うむ……。よし、許可する」

「隊長！ 私も行きます

「俺も行くぜ」

「それは駄目だよ」

輪廻がやんわりとヴァージニアとヴィセンテに言った。

「これはあくまで偵察だからね。僕一人で身軽に動ける方がいい。それに、みんなでここを抜けると戦列に穴が開く」

「けどよ、ラ『ティ』」

「そう心配するな」

輪廻の代わりにアブリルが言つた。

「こいつで駄目なら、お前たちが行つたところで意味がない。本當ならオレも行きたいが、ここを動くわけにはいかんしな。……ダールトン、必ず戻れよ」

「ラ『ティ』！」

「大丈夫だよヴァージニア。…それでは」

輪廻は剣を取り、防具は軽いレザーのアーマーだけで、単身乗り込んだ。

「……つーかあいつ、オレが言ったのを無視しやがって、キャスラーにだけ返事してたな。…まあ別にいいんだけど。…ん？ 何だこれ。 ああっ、やめやめ」

アブリルは頭を振つて意味のない思考を追い出した。隊長として考えなければならないことが山積みだった。

輪廻は味方の消息が消えた地点にたどり着いた。

広い間隔で王国軍兵士の死体が倒れている。

顔を確認すると、一番隊で何度も顔を合わせた男たちだった。

死体はいずれも一撃で殺されていた。

心臓に小さな傷。

剣を刺したか、あるいは別の得物か。

銀色のブレーメイルに穿たれた穴の周囲に乾いた血がべつとりとこびりついている。

どのような武器を使つたにしろ、フェルミナの鎧越しに心臓を一撃で貫くのは容易ではないだろう。

深呼吸をして剣を抜いた。

### 臨戦態勢。

居合とは、刀を鞘に収めた不利を埋めるための術理。たとえ輪廻に居合の心得があるとはいっても、この敵に対しても互角に渡り合えるとは思えぬ。

最高の条件、状態で戦つて、果たして勝てるだらうか。

死体が野ざらしにされているところとは、三度も送った伝令と元候は死体を見ているはずである。

であれば、彼らは死体を見て逃げ出したはずである。  
そして、「敵」は彼らを逃さなかつた。

(つまり……わたしも、敵に見つかっていると考えるべきだわ)

いつどこから襲つてきても不思議は 。

輪廻の思考はそこで途切れる。

自分以外の人の気配を感じて、そちらに飛び込んで斬りかかるつとした。

ヒュン、と風を切る音。自分の剣ではない。  
それが一瞬、細長い影に見えた。

(槍　　！　　)

その突きをとつさに剣で払つ。

火花が散つて、互いの武器の向こうに、相手の顔が見えた。  
手足の長い鎧色の髪の男。

予想外に出会えた輪廻を好敵手と認めたのか、男の顔には喜悦がわずかに浮かんでいた。

一見して獸のように獰猛な男であつた。  
しかし獸の皮の下にある、どうしようもなく理性で人を殺す部分を、  
輪廻は敏感に嗅ぎとつている。

鼓動が一瞬で沸騰する。

(「こつは……危ない）

ヴァージニアには偵察してくるだけだと言つたが、この男から戦わ  
ずには離脱できるとはとても思えない。  
そして戦つたが最後、この男に殺されるか、この男を殺すか、どちら  
かにひとつだろう。

おそらく引き分けはない。

余計な感情は一瞬で機能を停止する。  
輪廻の中にも存在する、どうしようもなく理性で人を殺す部分が、  
男の武器を瞬時に観察した。

まるで影をそのまま持ち歩いているような、光のない槍。  
材質は不明だが、さきほど打ち合わせた感覚ではおそらく何かの金  
屬。

形状は直線的で、長さも、通常の槍とほぼ同じ。槍先は反りのない両刃で、枝はない。

使い方を見ても、特殊な用途はないと判断できる。

輪廻は柄に力を込めた。

槍に対する剣は、長さの違いだけで著しい不利となる。

相手は構わず攻撃を続ける。

輪廻は一回目の突きを上から切り落とすようにしていなし、その隙をついて相手に肉薄した。

剣士の槍兵に対する勝機は得物の振れない懷に入ることである。

しかし。予感。

(あ ますい)

緊急脱出。

輪廻は体をひねり、とにかく相手から離れようと、姿勢を低くして横に飛び出した。

頭上を槍先がかすめる。

剣を振り上げて打ち合わせ 剣戟が響く もう一歩後退した。

相手の追撃はない。

輪廻は汗をかいていた。半分以上は、冷や汗である。

(そのまま行っていたら、死んでいた)

あの構えは「剣士殺し」である。

わざと隙をつくる一撃を放ち、敵が槍の懷に入りうとしたところで、槍を短く持ち替え、相手が剣を振るよりも早く一の槍を放つ。

（けど、この技は、あの男の ）

戦慄した。

相手も同様だったのか。輪廻の方を見て、かろうじて槍を構えてはいるものの動かない。

いくつもの可能性が頭をかすめ、結局、ひとつを除いてすべてが死んでしまった。

「斧原一心……団長」

か細い輪廻の声を聞いて、男は穂先を地面に向ける。

「お前、緒神輪廻か」

言葉よりも、打ち合わせた得物の手応えが、互いの正体を雄弁に証明していた。

輪廻「僕が偵察に行くよ」  
ヴァージニア「いや私が」  
ヴィセンテ「俺が行くぜ」  
アブリル「隊長のオレが行くしか」  
ゴアーシュ「…じゃあ僕が」  
一同「どうぞどうぞ！」

王国軍の要塞攻略作戦は失敗した。

要塞に対する襲撃と包囲には成功した王国軍であったが、帝国軍の数が予想以上に多かつたことと、帝国軍の別働隊が王国軍の補給線に度々の奇襲を仕掛けたことで、王国軍のマイルズ司令官は作戦の続行を断念した。

この判断には王国軍内から反対意見が噴出した。  
陥落させるには至らずとも、前線での戦術レベルでの優勢は未だに王国軍にあつたのだ。  
兵士たちの士気も高かつた。

実は総司令官のマイルズも継戦を望んでいたのだ。

しかし作戦会議で、このまま要塞を陥落させられずにいれば、黒の森が突破された場合、帝国軍に王国領内に侵攻されて正面作戦を強いられる可能性があることを部下に指摘され、やむなく中止を命じたのである。

黒の森に残してきた陽動部隊には、帝国軍の攻勢を長時間支えられるだけの兵員も補給もないと考えられたためである。

実際のところ、黒の森の帝国軍には陽動部隊を突破するだけの戦力ではなく、包囲部隊が対峙していた要塞の駐屯軍がこの方面における帝国軍のほぼ全軍であった。

王国軍は帝国軍の戦力を過大評価していたのである。

マイルズは、王国軍の退却に、要塞内部の帝国軍が沸き立つ声を聞いた。

王国軍がもう少し帝国軍よりも多勢であつたならば、最初の襲撃で速やかに要塞を陥落していたかもしれないなかつたのだ。

マイルズ司令官の握りしめた拳が屈辱に震える。

作戦失敗の報を受けて、黒の森の一一番隊と二一番隊も攻勢を中断し大きく後退した。

戦死者の数自体は少ないものの、戦場の状況が刻一刻とめまぐるしく変わるため、いちいちそれに対応させられた王国軍は休むこともままならず、後退を完了した際には安堵のために倒れる兵士が続出した。

今度こそ活躍しようと意気込んでいたヴァージニアだが、そもそも今回の戦闘はまともに敵と斬り合つ機会すらほとんどなく、この戦闘はただの徒労だったというのが実感だった。

ヴィセンテも、自分の中に秘めた戦意を爆発させる機会を失つて、その日の夜は興奮が冷めずに眠れぬ夜を過げた。

もどかしさを感じているのはゴアーシュも同様で、苛立つたヴィセ

ンテとの間で何度も不毛な衝突を繰り返すことになった。  
喧嘩のたびに、ヴァージニアに諫められた一人である。

帝国軍に弄ばれるかのように右往左往させられたことで、一番隊隊長アブリルの不機嫌は頂点を極めていた。  
いや、不機嫌の理由は帝国軍だけではない。  
輪廻の報告である。

「姿の見えない部隊」の偵察から戻ってきたときの輪廻は様子がおかしかった。

敵とは遭遇せず、という報告もどこかぎこちない。  
その点を追求したアブリルだったが、輪廻は何もなかつたの一点張りで、そういう普段と違う強情なところがまた怪しい。

（くそつ、一体何だよ……）

アブリルは不機嫌だつた。

自分が不機嫌である理由がよく分からないうことも機嫌をさらうに悪くしている。

輪廻のことを考へると顔をぶん殴りたくなる。  
しかし一方で輪廻の腕を完全に認めている自分もいる。

（…何でオレに相談しねーんだよ）

結局のところ、アブリルが不愉快なのはその一点なのである。

帝国軍は勝利に沸き立つていた。

このたびの戦場では、カリナは王国軍をほぼ完全に統制下に置くことができ、帝国の勝利のために自分はほとんど満点に近い働きができたと自負している。

カリナに反抗的だった一部の参謀たちも、勝利をもたらしたカリナに表立つて逆らうこととはしなくなつた。

また、援軍を送つた要塞の司令官に貸しを作ることもできた。

今後はいろいろなことが今よりもずっとやりやすくなるだろう。

(そつ、問題は王国軍じゃない)

もし自分に帝国軍の全権を与えてくれるなら。

カリナは一年以内に王都を制圧する自信がある。

もちろんそのような根拠のない自信は凡庸な無数の用兵家たちですら抱くものである。

そして国家はそのような個人の幻想に無制限に権限を与えてくれるわけではない。

しかし何はともあれ、第一の課題は帝国軍内の掌握なのである。自軍の掌握すらできない者が外敵に勝てるはずもない。

カリナはそこまで考えて、やはり頭に浮かんでくるのはイールズの

ことであった。

今回の戦場で、カリナが認識している範囲で最大の不確定要素がイールズであった。

そのイールズが、一度の出撃から帰ってきたきり、亀のよつに大人しくなってしまったのだ。

出撃前にぎりつかせていた闘争心もまるつきり失っているように見えた。

あれだけ自分の出番を欲していたイールズが、帰還してからは何一つカリナに要求しなくなつた。

戦闘中、カリナは王国軍を統制するのに時間と知恵のすべてをつぎ込まなければならず、イールズの態度を不審に思いつつも彼を問い合わせることはできなかつた。

しかし頭の片隅では常にイールズに対する不審と不安が渦巻いていたのだ。

戦闘が終わつた夜、黙つて自分の寝床に引き下がろつとしたイールズをカリナが呼び止めた。

「待つてください」

カリナは自分が驚くほどの不機嫌な声を出していた。  
イールズは形だけの笑いを浮かべて振り向く。

「ずいぶんと機嫌が悪いんだな、アンタ。勝つたつてのにその仏頂面は何だ」

「あのとき、あなたは単独で王国軍に乗り込んだ。そこで何があつたんですか?」

「別に何もねーよ」

「やうでしようか。『毒蛇のイールズ』。あなたの噂はたくさん耳にしていますよ。その噂と、今日のあなたの働きには、大きな隔たりがある」

「噂には尾ひれがつくもんだ。それに敵の小隊を一つかかり皆殺しにしたんだ。兵士ひとりの働きとしちゃあ十分だろ」

「ええ、もちろんその通りです。しかしあなたに求められているのは兵士ひとり分の働きではないし、ましてやあなたはこれまで求められた分の働きをこなしてきたはずです」

それは、戦略兵器としての。

「……あなたを帰還させ、その後一切出撃させなかつたものに、あなたは王国軍で出会つたのですね。それは一体何ですか？」

イールズはぱつが悪そうにわずかにうつむいた。  
長い長い沈黙が続いたが、しかしイールズは決してカリナの追求からは逃げようとはしなかつた。

「……昔の知り合いに会つたんだよ」

「王国軍に、ですか？ 見逃したのですか？」

「だつたらどうする？」

別にカリナはそのことでイールズを責めようとは思わなかつた。  
もちろん利敵行為は許されないことだが、一人の敵を見逃したところで大勢に影響はない。

カリナがそう言つと、イールズは豪快な笑い声を上げた。

「はははは。アンタは本当に変な女だ。普通の軍人ならこの場で俺を取つ捕まえて即席の軍法会議にかけてるところだ」

「あいにくとわたしは会議が嫌いなもので」

「そうだな。作戦会議のアンタはいつも面倒くさいんだ」

カリナの場合、作戦会議は作戦を話し合つ場になることはほとんどなく、単にカリナの考えた作戦を参謀たちに披露する場になつている。

それゆえに、カリナにとつての作戦会議は、自分の提案した作戦に反対する人間をいかに説得するか、というだけの面倒くさい場になつてしているのである。

イールズに揶揄されて、カリナはすました顔をして咳払いをした。

「安心しろ。別に知り合いだからって見逃したわけじゃない。まあ、半分くらいはそれだが」

「もう半分は？」

「見逃してもらつた」

「ともなげにイールズは答える。

「俺は昔そいつとずっと一緒に戦つてたんだ。だからそいつの技量はちゃんと分かつていた。手加減をして勝てるようなやつじゃない。

無論、俺の槍がそいつに及ばないとは思わなかつたがな。全力でやりあえれば十中八九俺が勝つだろう。しかし確実に勝てる保証なんではない。十回やって、一回か二回は、負ける可能性がある。だから俺は、そいつを見逃すのと引き換えに、俺のことも見逃してもらつたわけだ」

「ずいぶん弱気なんですね、蛇のイールズ」

「だから俺は今まで生き残つてこれたんだ。それにそいつは、そんなに簡単なやつじやない。十回のうち一回しか勝てなかつたとしても、最初にその一回を引き当てちまうような、わけのわからない部

分があるんだ」

「…面白い人ですね、あなたをそこまで慎重にさせたなんて」

「そいつは女だよ。でも剣の技術なら一級だ。俺とともにやりあえるのは、俺の知ってる限りじゃそいつを含めて片手で数えられる程度しかいないうな」

「その人は、どうして剣の道に？」

「……まあ、色々と込み入った事情があるんだ」

イールズは言葉を濁す。

他人の事情を勝手に暴くのを嫌つたのだ。

この男は意外とそういう細やかな部分での気遣いができるのだ。

「もしその人と戦うのが嫌なら、これからは」

「いや、変な気遣いは無用だぜ。久しぶりに会えて懐かしいとは思つたが、戦場で会つたら殺し合いをするのがルールだ。やつを見逃したのは情でも何でもなく、単に今は戦うべきじゃないと判断したからだ。……次に会うときは、確実にやつを殺せる方法を用意するつもりだ」

そう答えるイールズの顔に、カリナは獣のよつた本能と人間のよつな殺意が同居しているのを見た。

それじゃあおやすみ、と言い残して、イールズは大あくびをしながら去つて行つた。

真夜中、輪廻はテントの中で目を開けた。

意識は完全に冴え渡つてゐる。

兵隊仲間たちの寝息を聞いて、全員が眠つてゐることを慎重に確かめてから寝床を抜け出した。

夜の森の空氣は湿氣を含んで重厚感がある。

土を踏む音が静寂の中で非常に鮮明に聞こえていた。

空は木に覆われ、月明かりは届かない。

仲間たちのキャンプのはずれ、外と内を隔てる木の柵に輪廻は腰を降ろした。

びうせ暗闇ならば、柵など閉じても開いても同じだ。しばらく柵を閉じて自分の呼吸音に聞き入つていた。

やがて、輪廻のものではない足音が森の奥から聞こえた。暗闇の中でも、その男の気配だけはしっかりと認識できる。

「久しぶりだな、輪廻」

「そうだね、団長」

イールズが槍を肩に載せて立つてゐる。反対の手に、布でくるんだ細長いものを持っていた。

輪廻は笑顔でイールズを迎えた。

それから一人は、隣同士仲良く並んで森を眺めながら語り合つた。

「にしても驚いたぜ。お前、よりによつて男か」

「そりや驚いたのはわたしだつてそうだよ。おぎやあと生まれてみれば股に見慣れないモノがついてるんだから」

「俺はてっきり、男に見えるだけの女かと思つたぞ。前のときの前もそんな感じだつたしな」

「失礼なつ。緒神輪廻が歩けば町ゆく男どもはみんなハツとして振り返つたもんさ。だろ?」

「振り向いたやつなんかいなかつただろ。すれ違いざまにお前がみんな斬り殺していた」

「いくらわたしでもそこまで見境なしじやありません」

「へへつ…喋り方は昔のまんまだな」

声は男だから氣色悪いつたらねえが、トイールズが続けて、輪廻がその脇腹を小突く。

輪廻が江戸で更場武術団として活動していたときと同じように、団員の緒神輪廻と団長の斧原一心は互いに軽口を叩き合つた。

しかしトイールズの片方の手はあの影のよつた槍を常に握つていたし、輪廻の腰には鞘に收まつた剣がある。

輪廻は剣の柄に手を乗せるよくなことはしなかつたが、居合の達人である輪廻ならばトイールズが奇襲しても十分に防げる速度で抜刀することができる。

それは逆もまたしかり。

輪廻が奇襲してもトイールズはそれを槍で受けるだろ?

互いに心を許しても、自分の身の安全だけは決して明け渡さない。腹の底では常に仲間を敵に回す覚悟を。

それが、斧原一心が率いる更場武術団の在り方なのだ。

「それにしても驚いたよ。日本からこつちに生まれ変わつた奴には会つたことがあるけど、まさかわたしの知り合にもこつちに来てる

とは思わなかつた

「他にも江戸から飛んできたやつと会つたのか？」

「まあ、正確には江戸じゃないんだけど……」

輪廻はシャルロット王女を襲つた九条愛型のことを話した。すべて話し終わらないうちにイールズはぽんと手を打つた。

「ああ、あの五本差しのことか」

「知つてるの？」

「前に会つたことがある。同じ陣営だつたがな」

「……確かにそいつ、自分以外にも生まれ変わつたやつがいるつて知らなかつたみたいだけど」

「そりやそうだ。俺も生まれ変わりだつてことはそいつには言つてないからな。お前も気をつけろよ。特に九条みたいなヤバい男には、あんまり自分の素性をべらべら話すようなもんじゃねえ」

「九条つて一体何者なのさ」

「魔導同盟の実行部隊さ」

### 魔導同盟。

魔女の保護と魔女の力による国家間の均衡を目的に結成された組織である。

現在大陸に残つてゐる組織の中でもつとも古い起源を持つとされている。

当時、大陸の霸権を争つていた七大国の部分的な同盟によつて結成され、莫大な資金と人員が提供されたという。

現在もその流れを汲み、魔女の力が一国に集中しないよう国家間の調停を行つたり、魔女の力を持つ者が不当に扱われないよう保護するといった活動を行なつてゐる。

「でもあいつ、バリバリの武闘派だったよ？ あんなのが魔導同盟にいるっての？」

「魔導同盟は表向きはただの調停機関だが、実際はああいつのをいくつも飼つて暗躍しているらしい」

「嫌な話だね」

「それから、魔導同盟は魔女の力で作られた道具の回収もやつてる。もし回収に応じないやつがいた場合は子飼いの武闘派を使って無理やり奪わせる。ちなみに俺が奴らと一緒にいたときも魔導具の回収が仕事だった。と言つても、魔導具は途中で俺が頂いたわけだが」

「え？」

「影の槍だ」

イールズが槍を持ち上げた。

天に突きあげたところで、槍は夜暗に溶け込んで鮮明には映らない。

「おかげで俺も魔導同盟に追われる身だがな。しかしこれはただの槍じゃない。魔女の力で作られた槍だ」

「普通の槍と、何が違うの？」

「それは言えん。戦場で会つたとき、確かめてみればいい」

イールズは不敵に笑つた。輪廻もそれに応える。

「そうだ、忘れるところだつた。お前にこいつを渡そうと思つていたんだ」

イールズは布でくるんだものを輪廻に手渡す。  
輪廻は受け取り、布を取つた。

わずかに反りのある黒い鞘。剣のよつと見える。しかし鍔はない。  
輪廻は剣を抜いた。

「これは……打刀……」

「に、見えるだろう。特注だぜ。俺がこの槍をいただく前に使っていた剣だ。九条も似たようなのを使っていたよな。やっぱり俺たちは昔の武器を忘れられねえんだ」

「もらつていいの？」

「俺はもつと良い武器を持つていいからな」

輪廻は素早く刀を抜き闇の中に突き出した。

その抜刀の速度と剣筋の正確さに、イールズが口笛を吹いて囃し立てた。

刀を鞘に戻すと、なめらかな感触で滑るように収まる。

「すごいわね、これ。見た目はちよつと違つけど、手応えは刀そのものだ」

「それを使えば、多少は前の腕を取り戻せるんじゃないかな？」

「こここの世界の剣は重すぎる」

「お前も槍を使え。槍は良いぞ」

イールズはそう言つたが、そう簡単に槍術家に転向できればそんなに楽な話はない。

斧原一心は剣、槍、弓、全てに秀でた武芸者だった。

そのとき、輪廻はキャンプの方から駆け寄るひとつつの足音を聞いた。

「ラティ！」

ヴァージニアの声だった。

走りながら剣を抜き、一跳びで柵を越え、イールズに斬りかかる。イールズは余裕を持った動作でその剣を槍で受けると、ヴァージニアが飛びかかった速度よりもずっと素早く後ろに下がった。

イールズが構える。

ヴァージニアは彼我の実力差をまだ理解していない。

危険だ、と輪廻は思った。

輪廻はヴァージニアの前に立つた。

剣は抜いていない。無防備な体をイールズに晒す。

「ラディ！？」

ヴァージニアが戸惑つた声を上げる。

イールズは構えを解くと、来たときと同じように槍を肩にかけた。そのまま別れの挨拶もなく、イールズは森の奥に跳躍した。

よしわかつた、説明しよう。

これは影の槍だ。

魔女が創り出した知恵のひとつ。いや、武器か。

人類が決して辿り着くことのできない魔女の英知として、魔女が我々に与えたものだ。

昔大陸で起きた大きな戦争の時にな。あの時は本当…まいったよ。さあ、まずは振つてみるか。

…ふつふつふ。

見ての通り、継ぎ田すらない美しいフォルムだろ？

懐かしいな…私も見るのは久しぶりなんだ。

一体どんな素材でできているのか調べればわかるだろうが、すまない、私には興味がないんでね。

詳しいことはまた魔女たちにでも聞いてみるんだな、誰か知ってるんじゃないかな？

神はこれを爪楊枝に使つていると噂を聞いたことがある。私はそんなところは見たことないがね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4506v/>

---

輪廻は転生しました

2011年10月6日12時27分発行